高岡町埋蔵文化財調査報告書第７集

橋上遺跡

県営一般農道整備事業伊勢ノ原地区に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書

1995. 3

宮崎県高岡町教育委員会

高岡町埋蔵文化財調査報告書第７集

橋（はし）上（かみ）遺跡

県営一般農道整備事業伊勢ノ原地区に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書

１９９５．３

宮崎県高岡町教育委員会

序

この報告書は、県営一般農道整備事業伊勢ノ原地区にともない平成５、６年度に調査を実施した高岡町内に所在する遺跡の発掘調査報告書です。

本調査では、縄文早期の遺物が数多く出土し、多大な成果をあげることができました。発掘で得られた成果は先人が残した私達の文化遺産であり、これらの成果を生かすことが我々に課せられた重大な責務と考えております。

本書が町内に所在する文化財の保存・保護に活用され、また、本町の学術資料として学校教育、社会教育に生かされるとともに、幅広く活用していただければ幸いに存じます。

尚、発掘調査にあたって、関係者各位よりいただいたご指導、ご協力に対し心からお礼を申し上げます。

平成７年３月

高岡町教育委員会教育長

篠　原　和　民

例　　言

1　本書は、宮崎県中部農林振興局から委託を受け実施した県営一般農道整備事業伊勢ノ原地区に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　橋上遺跡は、国土座標をもとに遺跡全体に10mのグリットを設定している。(X軸－数字・Y軸－アルファベット)

3　石材同定は、宍戸章氏に依頼した。また、黒曜石の分析は、宮崎県工業試験場で実施した。

4　本書の執筆において、Ⅱ－第１節－１を合原敏幸氏（高岡町役場）に依頼した。

5　遺構の実測は、山本賢一朗（天ヶ城歴史民俗資料館学芸員）・[redacted]（埋蔵文化財調査室）の協力を得て島田がおこなった。また、製図は[redacted]（同調査室）の協力を得た。

6　遺物（石器）の実測は、松元の協力のもと山本がおこなった。

7　トレースは、小谷による。

8　写真撮影は、遺物を福川義輝氏に、遺跡の空中写真を（株）スカイ・サーベイにそれぞれ委託した。

9　出土土器観察表にある色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。

10　遺構図の方位は、磁北である。

11　橋上遺跡の遺物や図面は、高岡町教育委員会で保管している。

12　本書の編集は、島田がおこなった。

目　　次

Ⅰ　はじめに……9
第１節　調査に至る経過……9
第２節　調査組織……9

Ⅱ　調査の概要……10
第１節　遺跡の環境……10
1　地形的環境……10
2　歴史的環境……10
第２節　調査経緯……14
第３節　調査概要……14
1　基本層序……14
2　遺　　構……17
3　出土遺物……17

Ⅲ　調　　査……19
第１節　第１区の調査……19
1　縄文時代の遺構・遺物……19
2　その他の遺構・遺物……28
第２節　第２・３区の調査……28
1　縄文時代の遺構・遺物……28
2　近世の遺構・遺物……44

Ⅳ　ま と め……45

挿　　図

第１図　遺跡周辺地形図……11
第２図　高岡町遺跡分布図……13
第３図　橋上遺跡土層柱状図……14
第４図　橋上遺跡グリット配置図……15
第５図　第１号集石遺構実測図……19
第６図　第１区Ⅴ層礫群分布図……20
第７図　第１区Ⅴ層遺物実測図　(1)……21
第８図　第１区Ⅴ層遺物実測図　(2)……22
第９図　第１区Ⅴ層遺物分布図……23
第10図　第１区Ⅴ層黒曜石分布図……27
第11図　第１区Ⅱ層遺構図……28
第12図　第２・３号集石、第１号土坑実測図…29
第13図　第２・３区Ⅴ層礫群分布図　(1)……30
第14図　第２・３区Ⅴ層遺物分布図　(1)……31
第15図　第２・３区Ⅴ層遺物実測図　(1)……33
第16図　第２・３区Ⅴ層遺物実測図　(2)……34

第17図　第２・３区Ｖ層礫群・遺物分布図……37
第18図　第２・３区Ｖ層礫群分布図　(2)……38
第19図　第２・３区Ｖ層遺物分布図　(2)……39
第20図　第２・３区Ｖ層遺物実測図　(3)……41
第21図　第２・３区Ｖ層黒曜石分布図……43
第22図　通路状遺構実測図……44

図　版

図版１　遺跡遠景（北東側から）……49
遺跡遠景（東側から）……49
図版２　遺跡全景（北側から）……50
図版３　第１区Ｖ層全景（北側から）……51
第１号集石（北側から）……51
第１区Ｖ層遺物（No.25）出土状況……51
図版４　第１区Ⅱ層溝状遺構（北側から）……52
第２・３区（グリットＮ45）Ｖ層全景……52
第２・３区（グリットＮ44）Ｖ層全景……52
図版５　第２・３区（グリットＱ44）Ｖ層全景……53
第２・３区（グリットＲ42）Ｖ層全景……53
第２号集石（南側から）……53
図版６　第３号集石（南側から）……54
第１号土坑（北側から）……54
通路状遺構（西側から）……54
図版７　第３区全景（空撮）……55
図版８　出土遺物　(1)……56
図版９　出土遺物　(2)……57

表

表－１　第１区出土土器観察表……25
表－２　第１区出土石器観察表……26
表－３　第１区出土石材集計表……27
表－４　第２・３区出土土器観察表……35
表－５　第２・３区出土石器観察表……42
表－６　橋上遺跡出土遺物集計表……45
表－７　橋上遺跡報告書登録表……58

I　はじめに

第１節　調査に至る経緯

現在、高岡町では、県や町を主体として農業関連事業を推し進めている。そのため、必然的に埋蔵文化財における取り扱いが問題となり、保存処置を必要とする事業が多くなりつつある。

宮崎県は、昭和58年から大字浦之名伊勢ノ原地区において県営一般農道整備事業を進めている。

1992年に宮崎県中部農林振興局農地整備課（以下中部農林）より農道新設による事業計画の照会が文化課にあった。文化課は、道路の一部が橋上遺跡内におよぶことから、1993年４月に中部農林と文化課さらに高岡町教育委員会との間で協議を行ない、文化課が路線内の試掘調査を行なうこととなった。試掘調査は1993年５月17日～20日に実施され、その結果、２地区において遺物の出土があり、再度３者で協議を行なったが、現状保存は困難であるとのことから、高岡町教育委員会が主体となり、記録保存を目的とする事前の発掘調査を実施することとなった。調査は、事業計画により工事よりも先行する方法を取り、１地区（第１区）を1994年１月５日～１月26日、残りの地区（第２・３区）を1994年７月１日～９月14日に実施した。また、事業が今年度で終了することから整理作業ならびに報告書作成までを今年度中に実施した。

第２節　調査組織

調査主体　高岡町教育委員会

	1993年度		1994年度	
	教育長	篠原和民	教育長	篠原和民
	社会教育課長	岩崎健一	社会教育課長	岩崎健一
	社会教育係長	本田正雄	社会教育係長	本田正雄
庶務担当	主事	島田正浩	主査	丸山閲子
調査担当	主事	島田正浩	主事	島田正浩

発掘作業員

[redacted]

その他、調査ならびに整理にあたって、橘昌信（別府大学教授）、岩永哲夫・面高哲郎・永友良典・菅付和樹・戸高眞知子（県文化課）、小野信彦（北方町教育委員会）、金城透（沖縄県立博物館）、宍戸章の諸氏から助言をいただいた。また、[redacted]など、地元の各地権者の方々からは、土置場等の多大な協力を得た。

Ⅱ　調査の概要

第１節　遺跡の環境

１　地形的環境

ａ高岡町の地質

高岡町南部の高岡山地中央部及び東部には白亜紀の四万十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、一部玄武岩、凝灰岩などの塩基性岩類が含まれる。内之八重付近の砂岩頁岩互層中には塩基性岩類に伴って、厚さ１ｍ～２ｍのチャートが見られる。

高岡山地西部には、古第三紀の四万十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、高岡山地を南北に横切る高岡断層によって前述の白亜紀の層に接している。

高岡町の中心部付近及び高岡山地北部には、新第三紀の宮崎層群に属する砂岩、泥岩、砂岩泥岩互層が広い範囲で分布している。本層は四万十累層群を傾斜不整合に覆う海成層で、貝、カニ、ウニ等の化石を含む。

さらに、町中心部付近に及び西部は宮崎層群を不整合に覆い第四紀の礫、砂、及び粘土からなる段丘堆積物、主にシラスからなる姶良噴出物、及び主に礫、砂シルトからなる沖積層がみられる。段丘堆積物、姶良火山噴出物に急斜面とその上にある広い平坦面や緩斜面から形成される台地状の地形を有している。沖積層は、大淀川、浦之名川、内山川、飯田川等の河川流域沿いに分布している。

ｂ遺跡周辺について

この遺跡は、第四紀の姶良火山噴出物から成る台地上の広い平坦面に分布している。地層を台地の下方から見ていくと、下部には宮崎層群の泥岩がみられ、中腹あたりに、それを不整合で覆うかたちで段丘堆積物の砂礫層が堆積しておりその上部に姶良火山噴出物のシラスが堆積している。

この遺跡周辺の地形の形成過程については、第四紀洪積世に河川の堆積作用により、宮崎層群を覆い礫、砂、粘土が堆積して広い平野が形成された。そして、約2.2万年前現在の鹿児島湾奥を占める姶良カルデラ付近で起こった大規模な噴火に伴って主にシラスから成る火砕流が堆積した。その後海水面の低下、または土地の隆起等の理由により、河川の浸食作用が活発になり河川沿いは浸食され、浸食されなかったところは平坦面として残り、その周囲は削られて急な斜面が形成され現在のような地形になったのではないかと考えられる。

参考文献
木野義人・影山邦夫・奥村公男・遠藤秀典・福田理・横山勝三（1984）
宮崎地域の地質.地域地質研究報告（5万分の1図幅）.地質調査所

２　歴史的環境

70％以上を山林が占める高岡町は、東に位置する宮崎平野と西に広大に広がる標高170m以上の台地に挟まったところに位置し、狭い沖積平野や谷や小丘陵に生活の基盤をおいている。このような山々や丘陵などを含めた大淀川に起因する地理的条件は、その時々の人々が活躍するための歴史的要因である中のひとつである。

熊野神社
新田
原田
長谷溜池
橋上遺跡
赤谷
浦之名
国道
赤谷隧道
日産高岡工場
淀川
つつじヶ丘団地
伊勢ノ原溜池
長崎
0
500m

第１図　遺跡周辺地形図

高岡町の遺跡は、現在知られているだけで140箇所あり、それらの遺跡のほとんどは、町中央を東流する大淀川やその支流（内山川・浦之名川など）により形成された河岸段丘上に位置している。

旧石器時代では、表採資料として浦之名一里山地区の剥片尖頭器がある。また、昨年調査を実施した向屋敷遺跡は、集石遺構と共にナイフ形石器やスクレイパーが出土している。

縄文時代の遺跡は、密度の差こそあれ、河川流域の小丘陵には必ずといってよいほど存在している。特に早期と後期の遺跡が多く知られており、早期は、蜜柑栽培による遺構面の撹乱を受けることは少なく、残存状態も良好である。橋山第１遺跡・天ヶ城跡・宗栄司遺跡・橋上遺跡・久木野遺跡の５遺跡で、すでに発掘調査が実施されている。橋山第１遺跡は、早期と後期初頭の遺構遺物が検出された。早期は、幾型式かの集石遺構と、それに伴い、岩本・前平・塞ノ神式等の貝殻文系円筒土器や押型文土器、そして環状石斧が出土している。後期は、凹線文土器が出土している。また、時期に関係なく、多くの石錘が出土しており、当時の生活環境を知りうることができる。天ヶ城跡は、標高120ｍの独立した丘陵に位置し、集石遺構に伴い押型文を中心とした早期の遺物が出土している。また、九州一円からの黒曜石やサヌカイト製の製品が出土し、交易の広さを知る手がかりとなる。表採資料からは、山子遺跡が以前から知られており、浦之名川上流に位置する赤木遺跡と同様に後期の貝殻条痕文土器が表採される。

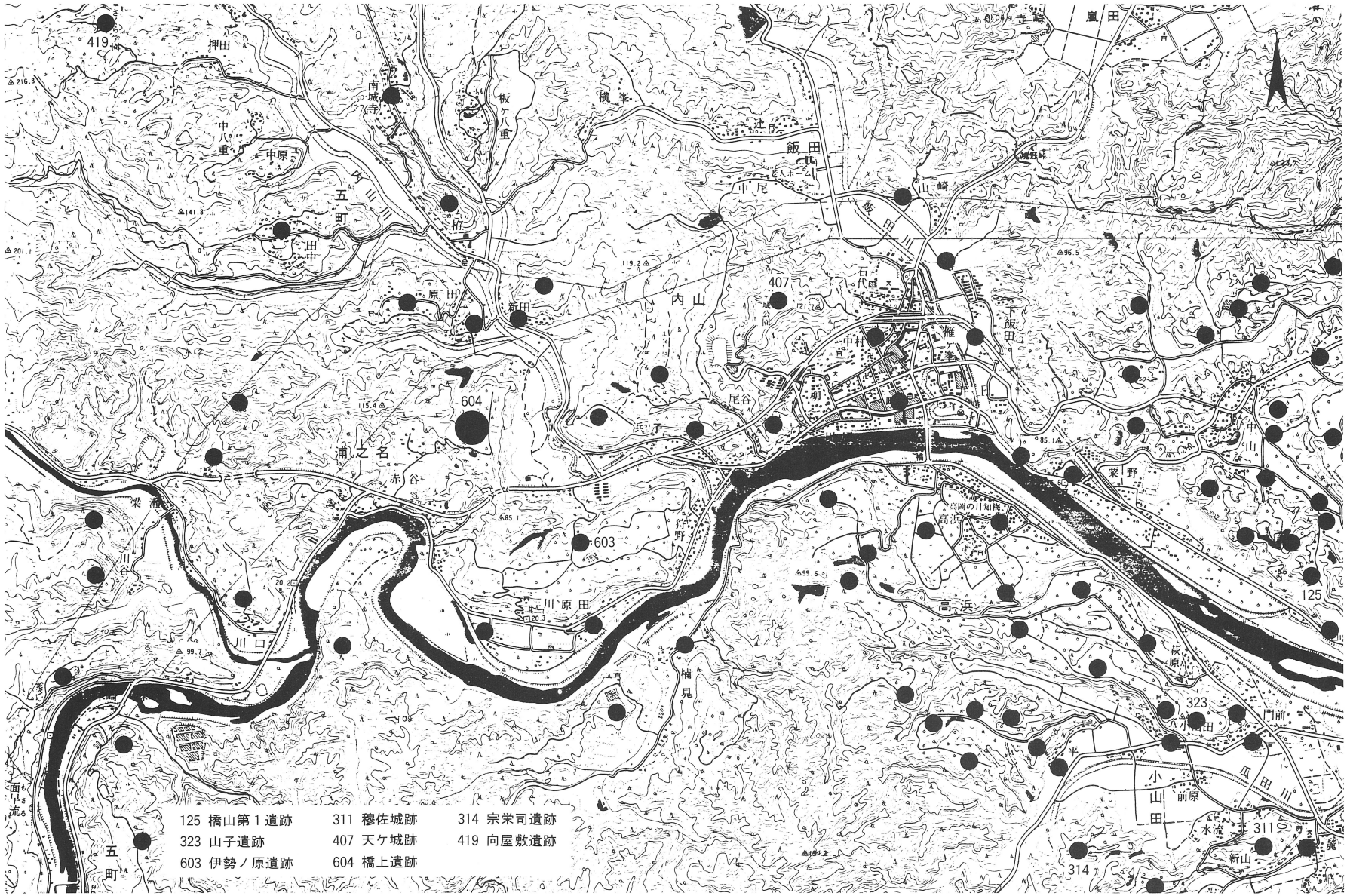
弥生時代では、学頭遺跡があげられる。学頭遺跡は複合遺跡であり、時期は中期後半から終末までが確認されている。河川に挟まれた舌状の微高地に位置する生活遺跡である。また、城ヶ峰遺跡では、後期の遺物が出土している。

古墳時代では、東高岡地区と浦之名一里山地区の丘陵を中心として遺跡が広がっている。久木野地下式横穴墓群で３基の調査が行われており、1984年の調査では鉄斧と玉類が出土し６世紀前半とされている。東高岡地区の古墳は未調査であるが、その中のひとつ高岡古墳周辺で古墳時代中期の壺と鉄製品（鉄斧など）が耕作中に発見されている。また、学頭遺跡では初頭～前期にかけての遺物が出土し弥生時代から引き続き集落が営まれている。それに隣接した八児遺跡でも住居跡が検出されている。

古代は、文献によると高岡周辺は「穆佐郷」と言われていた。古代になると、宗栄司遺跡・蕨野遺跡・二反田遺跡があり前者２遺跡で調査が行われている。蕨野遺跡では、９Ｃ後半の土師器生産に伴う焼成土坑（窯）が検出されている。

中世では、12世紀に「島津庄穆佐院」といわれ、南北朝期を経て、島津氏と伊東氏の興亡の歴史の中に入っていく。この時代の代表的なものは山城である。南北朝期は、穆佐城が日向の中心となり足利氏の九州における勢力拡大の拠点となった。それ以後、小規模な山城が点在したと考えられ、現在10箇所以上（文献等では18箇所）を確認している。穆佐城は、三股院高城・新納院高城とともに日向三高城と称されているところである。縄張り調査の成果として、南九州特有の特徴をもつとともに、機能分化をもたせた山城として評価されている。その後、穆佐城は、島津久豊（８代）・忠国（９代）の居城、伊東氏48城のひとつとなるなど両氏の勢力争いの表舞台にあった。また、このころには、山城などの城館遺跡以外でも町内全体に数多くの遺跡が広がる。

この時期までの中心地は穆佐城周辺だったのに対して、近世になると天ヶ城周辺に一変する。薩摩藩は、天ヶ城（高岡郷）と穆佐城（穆佐郷）の裾地に多くの郷士を居住させた。そして、綾・倉岡とともに関外四ヶ郷として、特に高岡郷はその中心として薩摩藩の東側の防御の要として発展する。高岡麓遺跡では、計画的な街路設計がなされ郷士屋敷群と町家群に分割されている。そして、第１次調査における町屋の調査で素掘の井戸や土坑等を検出し、大火跡と思われる焼土層を確認している。また、今年度の県文化課による調査で



第2図　高岡町遺跡分布図

3：100,000

は、武家屋敷の一画を調査し陶磁器類を検出している。近世の遺跡は、麓を含めて現在の居住地と重なる場合が多く、表採遺物や石造の墓標の存在からも参考となる。

第２節　調査経緯

調査対象の２地区のうち、グリットN14・15を第１区として調査1994年１月のかなり寒い時期に実施した。まず、土置き場の関係から調査対象地北側南北方向に１ｍ幅のトレンチを設定し、掘削状況からかなりの撹乱がみられた。そのためその周辺を土置き場とし、調査は、南側の約120㎡とした。重機で表土を剥ぎ、Ⅱ層（２次アカホヤ層）上面で溝状遺構を検出した。さらに重機でⅣ層（青灰色土層）中位まで下げ、包含層であるⅤ層（淡褐色土）を掘削した。空中写真撮影後、調査区内に東西方向へ１ｍ幅で５箇所のトレンチを設定したが、下層からの遺物等の出土はなく作業を終了した。

残りの１地区は、土置き場や農作業の通路確保等の関係からグリットN44を中心に南側を２区それより北側を３区とし、1994年７月から酷暑の中実施された。調査対象地内の現道には、水道管が埋設されており、それを避けるようにして調査地を設定した。調査地が２区と３区の隣接地点を中心に鈎状に広がるため、調査は、まず南側の２区から実施した。重機で表土を剥ぎ、Ⅱ層面で遺構が無いことを確認し、再びⅤ層上面まで重機で下げ包含層を掘削した。２区は北側で礫が密に検出され８月前葉に終了し、通路復元のため２区を埋め戻し、同時に３区の表土を剥いだ。３区でもⅡ層上面を追って表土を剥いだが、グリットO44の薩摩街道推定ライン辺りはⅥ層中位まで撹乱を受けていた。その撹乱は街道整備によるものと思われ、Ⅴ層の調査と薩摩街道の調査を同時に調査することとなった。グリットR42のⅤ層の掘削で遺物等の出土範囲が北側に延びる様相であったので、空中写真撮影後、調査範囲を北側に約10ｍ程延長させた。

第３節　調査の概要

１　基本層序

橋上遺跡が位置する台地は、大規模な造成等は過去にはなく、耕作作業や部分的な土取りによる撹乱を受けているのみである。遺跡における層序は、１区から３区は一様であり、柱状図のとおりである。

Ⅰ　耕作土。40cm前後で軟質の茶色を帯びた黒褐色土である。

Ⅱ　２次アカホヤと言われているものである。アカホヤと比べサラサラとして暗色である。上面を耕作等の撹乱を受ける。

Ⅲ　アカホヤと言われる鬼界カルデラ起源の噴出物で10cm前後の堆積である。

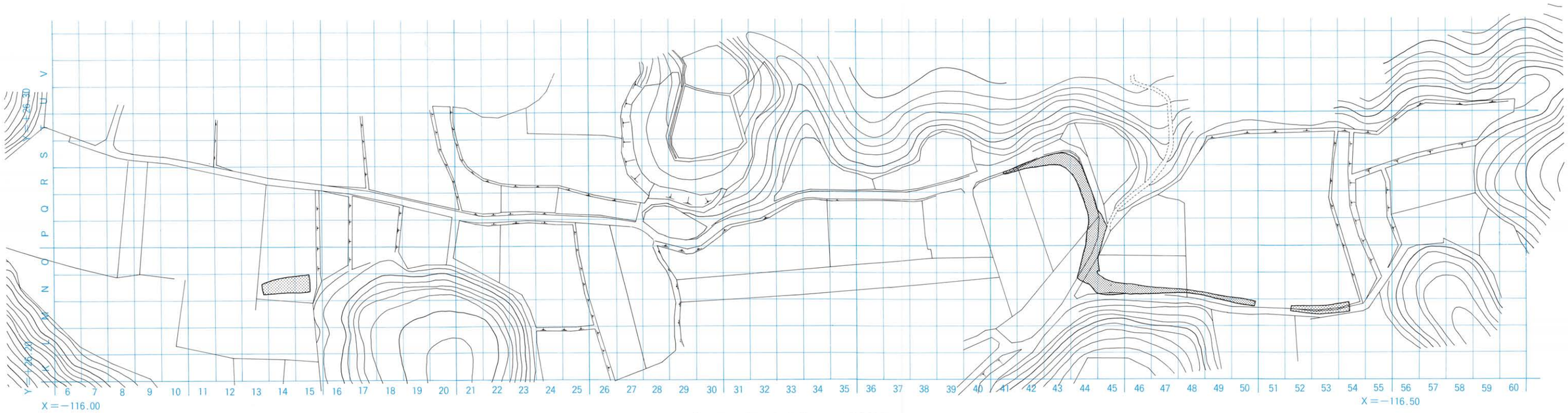
Ⅳ　青灰色砂性土に黒灰色土小ブロックが混入する。カシワバンに相当する層ではなかろうか。

Ⅴ　10～40cm程のにぶい黄色を帯びたような淡褐色弱砂性土で、縄文早期の遺物包含層である。

Ⅵ　約15cm程の黒灰色と淡褐色のブロック土である。

Ⅶ　約15cm程の褐色砂性土と黄色パミスのブロックを含むにぶい褐色土で、Ⅵ・Ⅶ層とも無遺物層である。

第３図　橋上遺跡土層柱状図



第４図　橋上遺跡グリット配置図

2　遺　構

遺跡の状況は、１区から３区まで一様である。Ⅱ層上面では、１区で時期不明の溝状遺構を検出した以外は何もなかった。３区での薩摩街道と考えられる痕跡は、その周辺がⅤ層上面まで撹乱を受けていた関係で、その面で検出された。Ⅴ層では、縄文早期前葉を中心とした遺物が出土しその時期の包含層として認められた。遺構は、集石遺構３基、土坑１基で、集石遺構は、掘り込みや配石をもたない。遺物や礫の出土分布状況からいくつかの平面的なまとまりがみられる。

3　出土遺物

今回の調査による遺物の出土は、石器や土器片など総数にして600点前後であり、そのほとんどは、縄文早期に相当する。土器は、円筒形がほとんどで角筒形は若干見られる程度である。石器は、製品となるものは少なく、ほとんどは、剥片や削片であった。製品は、剥片石器を中心に、小型磨製石斧や敲石等が出土した。出土遺物は、いくつかの形式・型式にそれぞれ分類でき、本書では、下記の分類を基準にして表現することとする。

土器　土器は、新東晃一氏の提示した分類を参考にして分類した。

Ⅰ類　口唇部に細かな刻目をもち（無いものもある）、口縁部や口縁端部に貝殻や篦で横・縦位に１～２段の刺突文を施す。また、押引き状になるものもある。胴部は、貝殻による横・斜位の条痕を施す。内面は、磨きを施しているものが多く丁寧である。器形は、円筒形平底が多く、角筒形は浅い貝殻条痕をもつ胴部片が１～２点出土したのみである。器壁の厚薄は様々で、すべてバケツ状に近い形状になるものと思われる。「前平系」と称している土器群のうち、「前平式」といわれるものに類すると思われる。出土遺物内では、文様や施文手法によってａ～ｆ類に細分される。

Ⅱ類　「吉田系」と称している土器群である。口唇部に刻目をもち、口縁部貝殻腹縁刺突文が施され２～３段にクサビ状突帯を巡らす。そして胴部は、条痕を地文とし縦位に刺突文線を施すもの（ａ類）と口唇部に刻目をもち、口縁部貝殻による刺突文（押圧文）や押引文を施し、クサビ状突帯は有るものと無いものがあり、胴部は横位の押引文を施すもの（ｂ類）とがある。、胴部下端には縦位の条痕を巡らす。器形は円筒形平底で、器壁は薄い。

Ⅲ類　「押型文系」と称している土器群である。山形押型文と楕円形押型文がある。また、山形押型文が崩れたような文様をなす「手向山式」もここにいれた。ここに分類される遺物は、すべて胴部片であり、器壁は薄い。

Ⅳ類　「撚糸文系」と称している土器群である。外面に撚糸文を施すものをここに分類した。変形撚糸文を施す「石峰式」もここにいれている。

その他　Ⅰ～Ⅳ類に属さないものも少量ながら出土している。条痕文、沈線文、細線文など、文様の施文によって分類される。

石器　石器は、剥片や削片以外の製品は、器種ごとに分類した。また、剥片や削片において調整痕がみられるものについては、「使用痕剥片」として別に分類した。「使用痕剥片」としての分類は阿子島香氏のいうところを参考にして、剥片の両側縁に微小剥離痕が平行かつ連続して認められるもののうち、剥離痕のそれぞれの形状が、深い弧状の輪郭をもつもの、長方形（台形）の剥離が斜めに入り刃部縁辺部からはみだしたもの、調整が複雑または重複するもの、三日月形や方形の使用痕が両側縁に平行するもの、方形の剥離が刃部縁辺から内部に幅広く広がるもの等についてのみ、「使用痕剥片」として判断した。

石材については、A類　砂岩、B類　シルト岩、C類　頁岩、D類　凝灰質頁岩、E類　ホルンフェルス、F類　チャート、G類　輝石安山岩、　H類　黒曜石、というようにそれぞれ分類した。また、石器のほとんどが黒曜石で占められていることから、黒曜石については、肉眼観察によりそれぞれの特徴から次のように細分した。

H類－1　乳白色で気泡とガーネットを含む。

H類－2　乳白色で半透明である。縞がある。

H類－3　灰色で透明である。微細な気泡や雲母の縞（墨流れ状）がある。

H類－4　灰色で半透明（黒色含有物による濁りがある）である。気泡や雲母がある。白色斑が散点する。

H類－5　灰色が強いキャラメル色で透明感が強い。気泡がある。白色斑が散点する。

H類－6　キャラメル色で透明感が強い。気泡がある。白色斑が散点する。

H類－7　キャラメル色で透明である。剥離面が丸みを帯び（風化？）、手触りはなめらか。白色斑が散点する。

H類－8　キャラメル色で透明である。気泡が少なく、手触りなめらかである。

H類－9　透明部分はキャラメル色、不透明部分は光沢が弱い。

H類－10　黒色で不透明である。白色斑が散点する。

黒曜石の観察分類は、宍戸章氏の協力のもと20～40倍の顕微鏡を併用しながら、各産地の採集石材と出土石材とを比較する方法おこない、あわせて蛍光X線分析を実施した。分析結果は、今回間に合わなかったが、肉眼鑑定のみの結果では、1は姫島産で、2は、桑ノ木津留での採集石材に同様のものがあった。また、3～9は、桑ノ木津留や日東産のものと類似している。10は、上牛鼻産に似ている。ということであった。

Ⅲ 調　　査

第１節　第１区の調査

１　縄文時代の遺構・遺物

第Ⅴ層で遺構と遺物が確認された。調査面積は約120㎡で、包含層の厚さは約30㎝前後である。

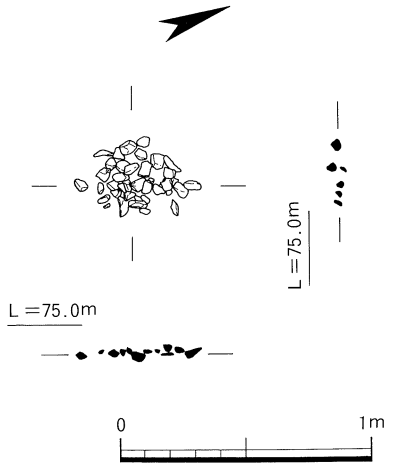
ａ遺構

礫群（第６図）

礫の出土状況は、調査区内に適度に散乱している。地形そのものの傾斜角が１ｍで高低差３㎝程度であり北から南方向に低くなる。視覚的には高低差を感じさせるものではなく、自然力による極端な撹乱はさほど無いものと考えられる。焼石が集中しているところが調査区中央両側にあるものの集石遺構といえるほど密ではなく、礫同士が重なって出土しているものではない。それらの焼石は、何らかの理由による放棄破壊の残骸かもしれない。その周辺は、調査区際にいくほど密になっている状況ではなく、調査区外にそれらの礫が使用された場所（集石遺構）を求めるよりは、それらの礫近辺を考えるのが妥当である。また、熱を受けていない礫（使用前）が調査区内北側に多くみられ、集石遺構に伴う準備礫の一部であろう。礫の垂直分布状況は、礫のほとんどは遺物と同様に第Ⅴ層の上半分から検出され、レベル的に礫ごとに大きな差はない。礫自体の大きさは、配石となり得る形状の礫が２～３点ある以外は、３～15㎝ほどがほとんどである。配石となり得る礫周辺には、使用前後に関わりなく礫の目立った散布はみられない。配石となり得る礫自体熱を全く受けておらず、使用するために集められていた礫（準備礫）の一部であろう。

第１号集石（第５図）

周辺の礫群よりも５～10㎝低いレベルで検出された。径50㎝の集石であり、掘り込みや配石等はない。礫の重なりは１段で寄せ集めておいた感がある。礫自体は約５㎝大で、さほど大きなものではない。熱を受けた痕跡がなく未使用のものと思われる。この場合の礫は使用するために運んできて集め置いたものと思われるが、この遺構周辺には熱を受けていない礫の散布はみられるものの、この遺構の礫の数量からしても炉をなすにしてはかなり少なく、炉を造る目的で集められた礫の残りであると思われる。



第５図　第１号集石遺構実測図

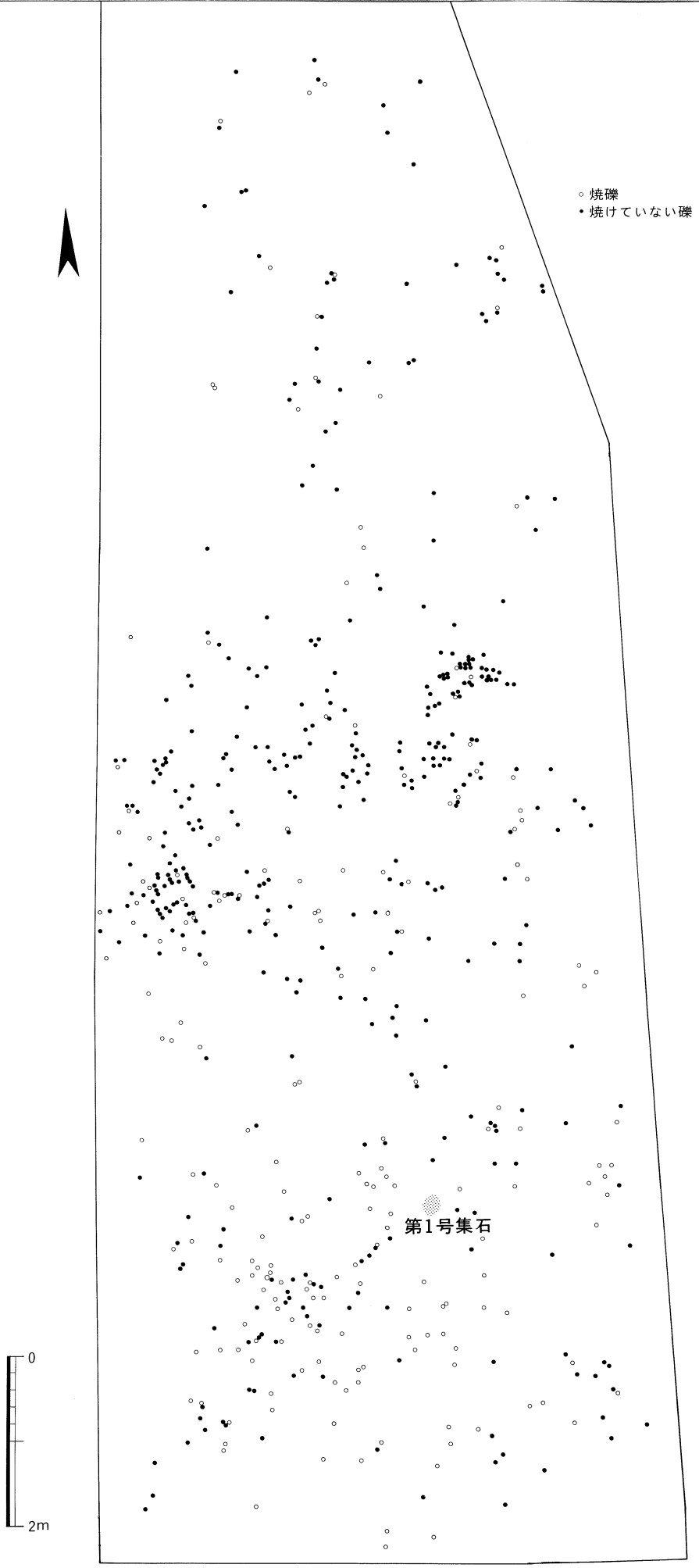
ｂ遺物

土器（第７図）

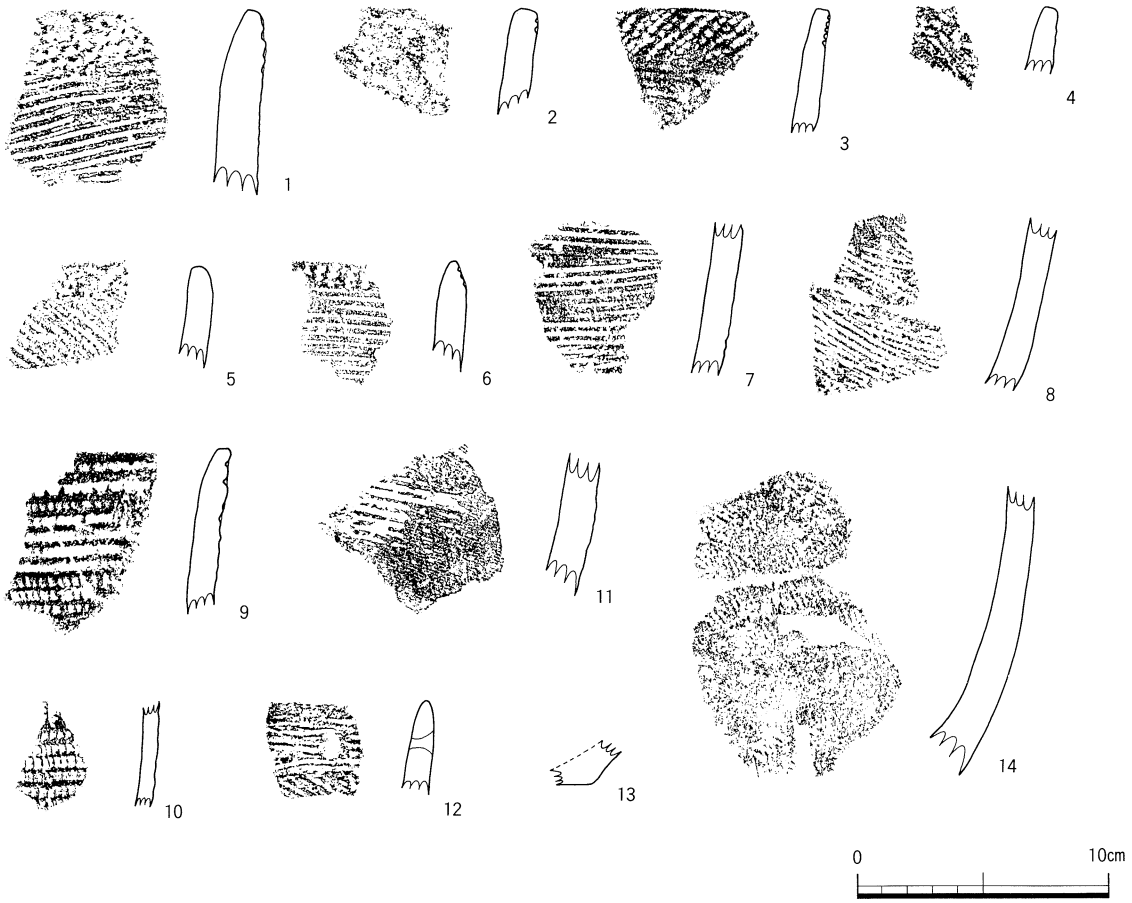
土器片は、口縁部９点、胴部91点、底部３点である。口縁部や胴部を文様等で分類すると、明確なものでⅠ類が６点、Ⅱ類が４点、その他（条痕文系）が１点である。胴部に貝殻復縁条痕文を施した49点は、Ⅰ類に伴うものであろう。底部も平底で、他の部位と同様円筒形である。

Ⅰ類　（１～８）

口縁部に斜位または、縦位に箆か貝殻腹縁で刺突文を施す。胴部は、横位または斜位の貝殻腹縁条痕文で、内面調整は、かなり丁寧である。口縁部の文様の施文場所によってさらに分類できる。ａ類



第6図　第1区Ⅴ層礫群分布図



第７図　第１区Ⅴ層遺物実測図 (1)

（６）　口縁端部に貝殻腹縁刺突文を施し、口縁端部が細くなり断面が三角形のようになる。内面にミガキの痕跡がみられる。

ｂ類（１～５）　口縁部横に貝殻腹縁刺突文を施すもので、口唇部は刻目はなく平坦である。１は貝殻腹縁刺突文を２段に分けて上部は縦位に下部は斜位に施す。また、他と比べて器壁が厚い。２は、剥離がひどくかろうじて刺突文が確認できる。

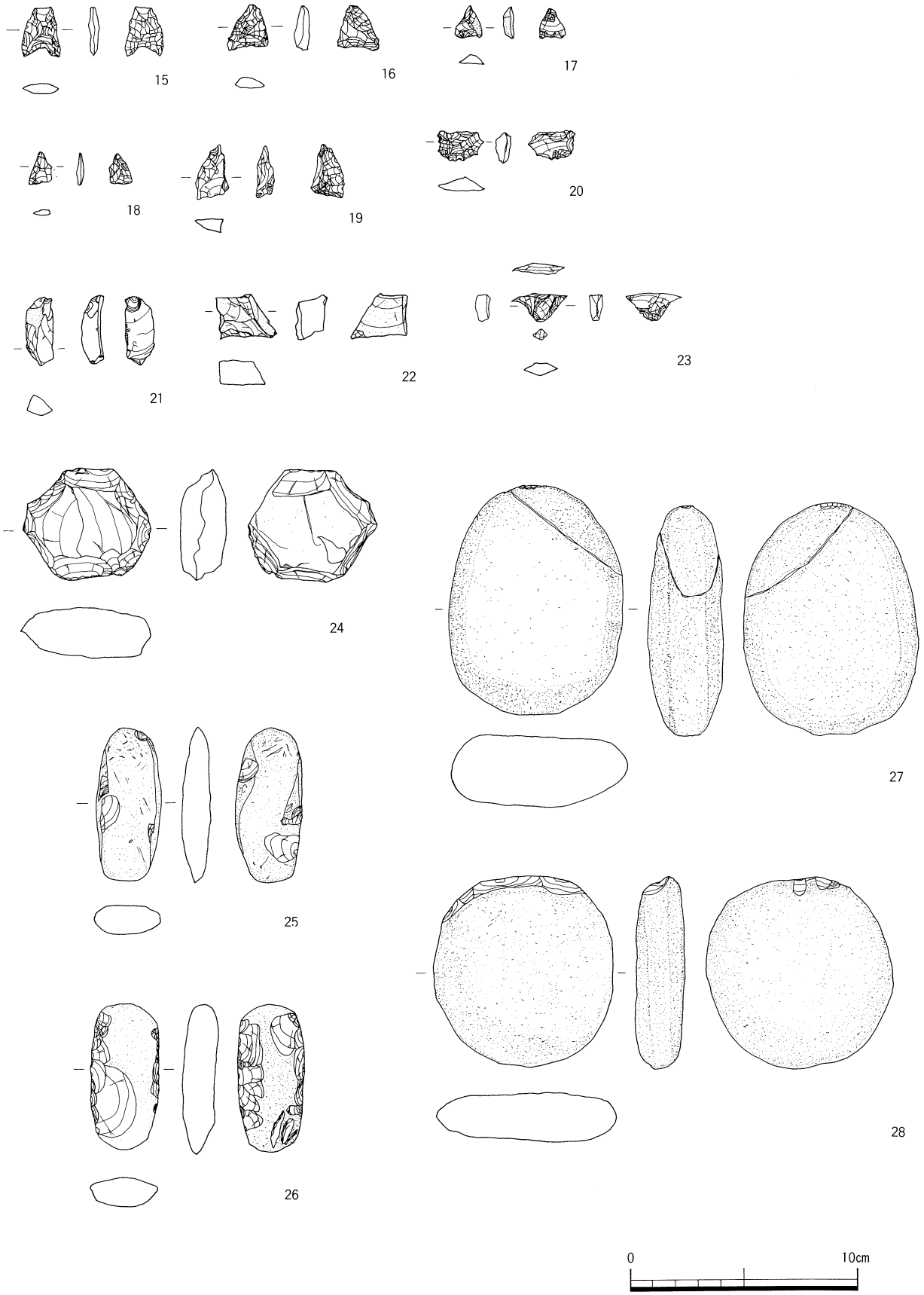
Ⅱ類（９・10）

ｂ類のみ出土している。９は、まず、横位の貝殻腹縁刺突文線（下方向への押し引きかもしれないが）を２本平行に巡らせ、その下には左から右方向への貝殻腹縁押引文が何条にも平行に施される。口唇部の刻目は明確でなく、口縁部には、クサビ状突帯文はみられない。10は、左から右方向への貝殻腹縁押引文をもつ胴部片で、上部にクサビ状突帯文の痕跡がある。器壁が薄い。

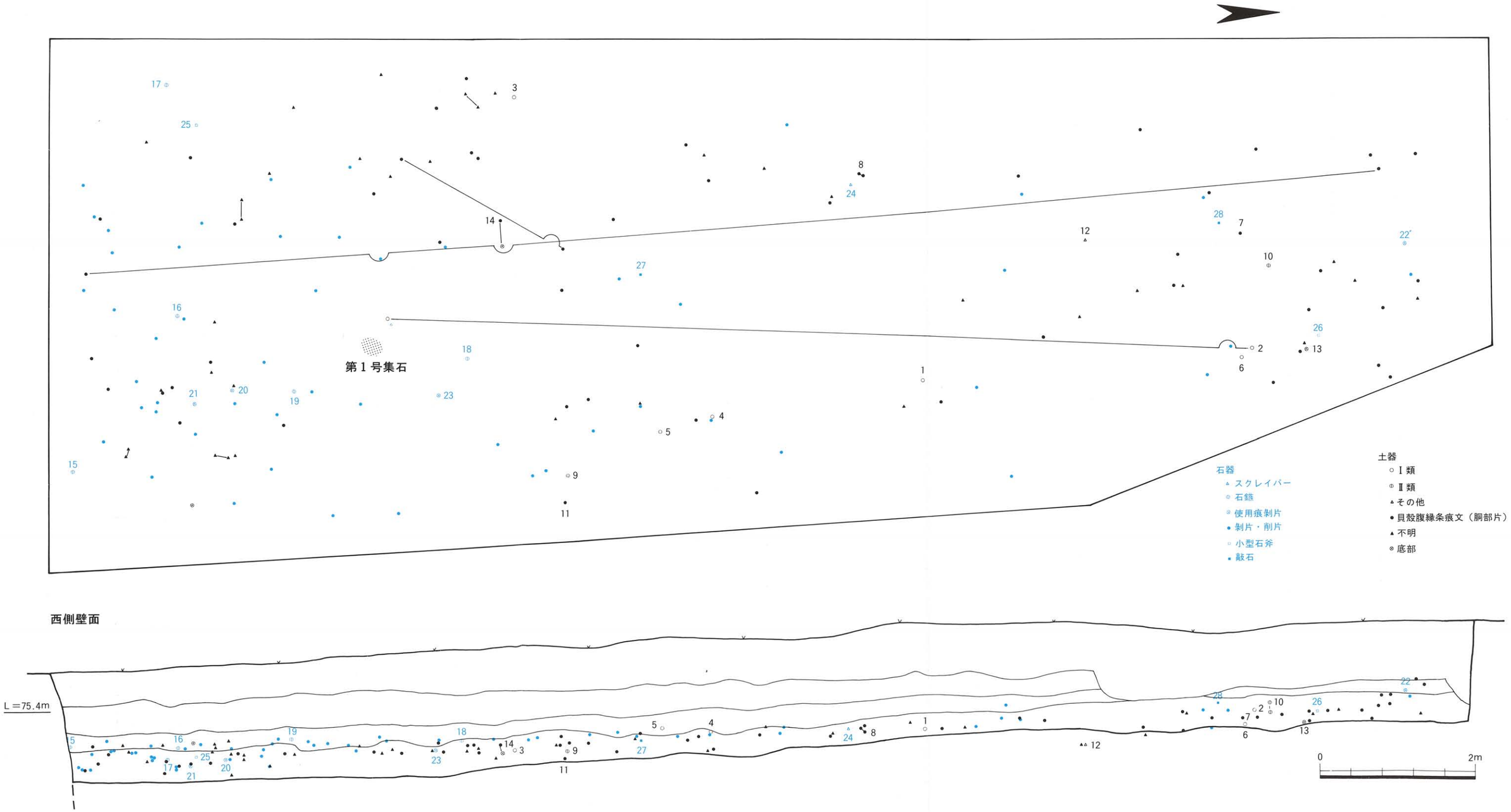
その他（12）

口縁部は丸く楕円形の穿孔を持つ条痕文系の土器である。口縁部は横位に、そして穿孔の下からは斜位に条痕文を施す。

そのほかに底部として11・13・14がある。すべて平底になると思われる。11は胴部下端（底部上部）片で、貝殻腹縁条痕文を施し、一部分なんらかのアタリで条痕が消えている。内面にミガキの痕跡がみられる。14は貝殻腹縁条痕文を施している。



第８図　第１区Ⅴ層遺物実測図(2)



第９図　第１区Ⅴ層遺物分布図

表1　第1区出土土器観察表

No.	挿図No.	図版No.	部位	文様	調整	色調 外	色調 内	焼成	胎土	備考
1	7	8	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 2.5 Y 淡黄8/4	Hue 2.5 Y 浅黄7/3	堅	乳白色粒(1㎜～1.5㎜) 黒色粒 黒色光沢粒	
2	7	—	口縁部	貝殻腹縁刺突文	ナデ	Hue 5 YR にぶい橙7/4	Hue 7.5 YR にぶい橙7/4	堅	乳白色粒 透明粒　多量	
3	7	8	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 7.5 YR にぶい橙7/3	Hue 7.5 YR にぶい橙7/4	やや堅緻	白色半透明粒 黒色光沢粒	
4	7	—	口縁部	貝殻腹縁刺突文	ナデ	Hue 2.5 Y 黒褐3/1	Hue 2.5 Y 灰黄7/2	やや堅	黒色光沢粒	
5	7	—	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 2.5 Y 浅黄7/3	Hue 2.5 Y 浅黄7/3	やや堅緻	白色粒	
6	7	—	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ミガキ	Hue 5 YR 橙6/6	Hue 5 YR にぶい橙6/4	堅	灰色粒	
7	7	—	胴部	貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 2.5 Y にぶい黄6/3	Hue 2.5 Y にぶい黄6/3	堅	黒色粒 乳白色粒 半透明光沢粒	
8	7	—	胴部	貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 10 YR にぶい黄橙7/4	Hue 10 YR にぶい黄橙7/3	堅	透明粒 乳白色粒	
9	7	8	口縁部	貝殻腹縁押圧文線 貝殻腹縁押引文	ナデ	Hue 10 YR にぶい黄褐5/3	Hue 10 YR にぶい黄橙6/4	やや堅緻	灰褐色粒 黒色粒	
10	7	—	胴部	貝殻腹縁押引文	ナデ	Hue 7.5 YR にぶい橙7/3	Hue 5 YR にぶい赤褐5/3	やや堅緻	極小光沢粒	クサビ形突帯
11	7	—	胴部	貝殻腹縁条痕文	ミガキ	Hue 10 YR にぶい黄橙7/4	上- Hue 7.5 YR 橙7/6 下- Hue 10 YR にぶい黄橙7/4	堅	黒色光沢粒 乳白色粒(0.5㎜～1.5㎜) 半透明粒	
12	7	9	口縁部	貝殻腹縁条痕文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 2.5 Y にぶい黄6/3	Hue 2.5 Y 浅黄7/4	やや堅	乳白色粒	穿孔有
13	7	—	底部	――――	ナデ	Hue 7.5 YR にぶい橙7/4	Hue 5 YR 橙6/6	やや堅	黒色光沢粒 透明粒(1㎜前後)	
14	7	—	底部	貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 5 YR 橙6/6	Hue 5 YR にぶい橙6/4	堅	白色粒(0.5㎜～1㎜)	

石器（第8図）

1区の出土石器は、石鏃・使用痕剥片・スクレイパー・小型磨製石斧・敲石等である。石材は、剥片石器のほとんどが黒曜石で占められており、その他にチャート・シルト岩・頁岩等が使用されている。

石鏃（15～19）

石鏃は、すべて黒曜石を素材としている。15～17は抉りが入ったもので、15は両面に調整を施し、頭部は欠損している。16・17は、未調整段階のものであろう。18・19は、三角形状のものである。18は右側下端部が欠損している。19は右側に欠損がみられ、右下方向からの調整が認められることから、製作段階における欠損の可能性がある。

使用痕剥片（20～23）

すべて、黒曜石である。不定形や縦長の剥片を素材にしている。使用痕を観察すると20・21は半弧状の微

表2　第1区出土石器観察表

No.	挿図No.	図版No.	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	石　材	備　考
15	8	9	石　鏃	2.1	1.7	0.5	1.5	H類-1	
16	8	9	石　鏃	2.0	1.8	0.6	2	H類-4	
17	8	—	石　鏃	1.4	1.2	0.4	0.75	H類-6	
18	8	—	石　鏃	1.4	1.0	0.3	0.5	H類-6	
19	8	—	石　鏃	2.3	1.4	0.7	2.5	H類-4	
20	8	—	使用痕剥片	1.3	2.0	0.5	1.5	H類-3	
21	8	—	使用痕剥片	3	1.2	0.85	2.5	H類-8	
22	8	—	使用痕剥片	2.0	2.6	0.7	8	H類-5	
23	8	—	使用痕剥片	1.2	2.4	0.6	2	H類-5	
24	8	9	スクレイパー	4.9	5.7	2.0	67	D類	
25	8	9	小　型 磨製石斧	5.9	2.4	1.1	24	B類	
26	8	9	小　型 磨製石斧	6.5	3.0	1.4	34.5	B類	
27	8	—	敲石	10.1	8.5	3.0	352	A類	
28	8	—	敲石	8.5	8.2	2.0	195	A類	

小剥離痕で、22は下端部に不定形な微小剥離痕が認められる。21は縦長剥片を素材としている。22は不定形な剥片を素材とし、打面部は欠損している。

23はナイフ形石器の基部加工に似ているがやや弱い感がある。

スクレイパー（24）

石材は凝灰質頁岩（四万十層の緑色岩類）である。下端部に刃部調整を施し、裏面は自然面が残る。全体的には調整が粗く、製作段階のスクレイパーとも考えられる。

小型磨製石斧（25・26）

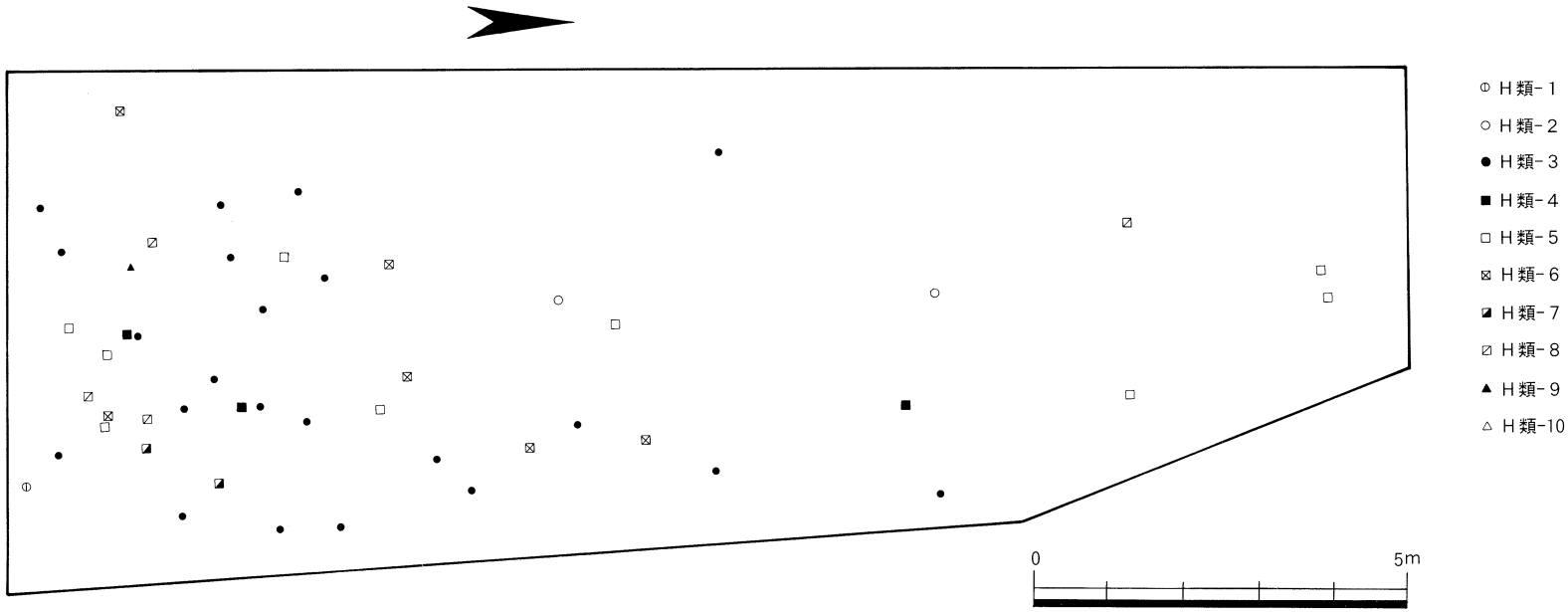
石材はシルト岩である。25は刃部をかなり鋭くまた丁寧に磨いており、両側縁に剥離痕が残っている。上端部に磨いたときの傷のようなものがみられる。26も同様に刃部をかなり鋭くまた丁寧に磨いている。表裏両面に調整が残る。右側縁の下端部に脈のようなものがみられる。

敲石（27・28）

両方とも偏平な砂岩質の円礫を用い、敲打による剥離痕が認められる。28は、表面が風化している。

分布状況（第9・10図）

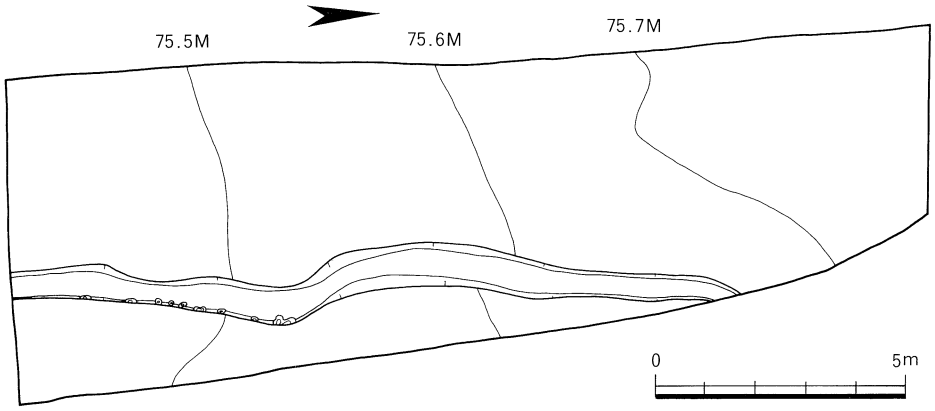
1区のV層出土遺物は、土器103点、石器69点である。平面分布を見ると、土器は、Ⅰ・Ⅱ類の分布にはまとまりがなく、胴部に貝殻腹縁条痕文を施す土器片同様全体に散布している。石器は、南側である程度のまとまりをもつが、そのほとんどは黒曜石の剥片や削片であり、製品によるまとまりは全体をみてもさほど感じない。調査区北側で敲石と小型石斧が出土しているが、その周辺での石器製品や剥片の出土はほとんど無く、南側との出土状況は全く異なっている。石材の分布は、剥片でみると、ほとんどが黒曜石で、特にH類－3・5が南側に集中して散布している。これらの剥片は、すべて不定形で形状が小さいものが多いことを考えれば、製作廃材とも考えられる。しかしながら、剥片と製品の分布は、石鏃等のように製品が人的行為による移動を伴うものの場合、それは必ずしも一致するものではない。石鏃等に使われる石材がかなりの割合で出土することは、製品自体の数量が少なくともそのような製品の需要が高かったものと推測できる。遺物



第10図　第１区Ⅴ層黒曜石分布図

表３　第１区出土石材集計表

	分類 / 器種	A	B	C	D	E	F	G	H										計
									1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
1　区	石　　鏃								1			2		2					5
	使用痕剥片										1		2			1			4
	スクレイパー				1														1
	小型摩製石斧		2																2
	敲　　石	2																	2
	剥　　片	1		2	1	6		1		2	22	1	8	4	2	4	1		55
合　　計		3	2	2	2	6		1	1	2	23	3	10	6	2	5	1		69



第11図　第１区Ⅱ層遺構図

の移動（接合）については、土器は、接合関係から南北に大きな痕跡がみられ、最大直線距離で約17mをはかる。小さい移動は、直線距離約0.3m前後で、これは南側で顕著にみられ、その辺りの大きな撹乱は認められない。また、ローリングを受けた土器はあるものの数が少なく、また南側に集中しているわけではないから、土器の大きな移動が撹乱の痕跡とは一概にはいえない。石器は、接合関係がはっきりせず確認できない。垂直分布をみると、遺物の出土は、例外はあるもののⅤ層の上半分で出土している。また、No.10は約0.1m直下で接合し、No.14も約0.1mのレベル差で接合している。その他にも同じような状況がみられ、包含層0.1m内での時期的な同一性が認められる。しかしながら、No.12が下位から出土している以外は、型式ごとの時期差として捉えるような出土状況とはいえない。

2　その他の遺構・遺物

a 遺構

溝状遺構（第11図）

第Ⅱ層上面における遺構検出で南北に延びる溝状の遺構を検出した。溝の幅は、0.7～１mで深さは、平均0.1mである。床面は平坦で、レベルは北側で高く南側で低い。壁の立ち上がりは部分的にくたびれたところがある。溝南東部床面際に杭を打ち込んだようなピット列がある。遺構の埋土は、耕作土よりも黒褐色に近い。用途ならびに時期不明の遺構である。

第２節　第２・３区の調査

1　縄文時代の遺構・遺物

２・３区の調査記述は、調査地が１区とは違って、２・３区は隣接しており包含層の状況も同じであることから区分けせずにおこないたい。

a 遺構

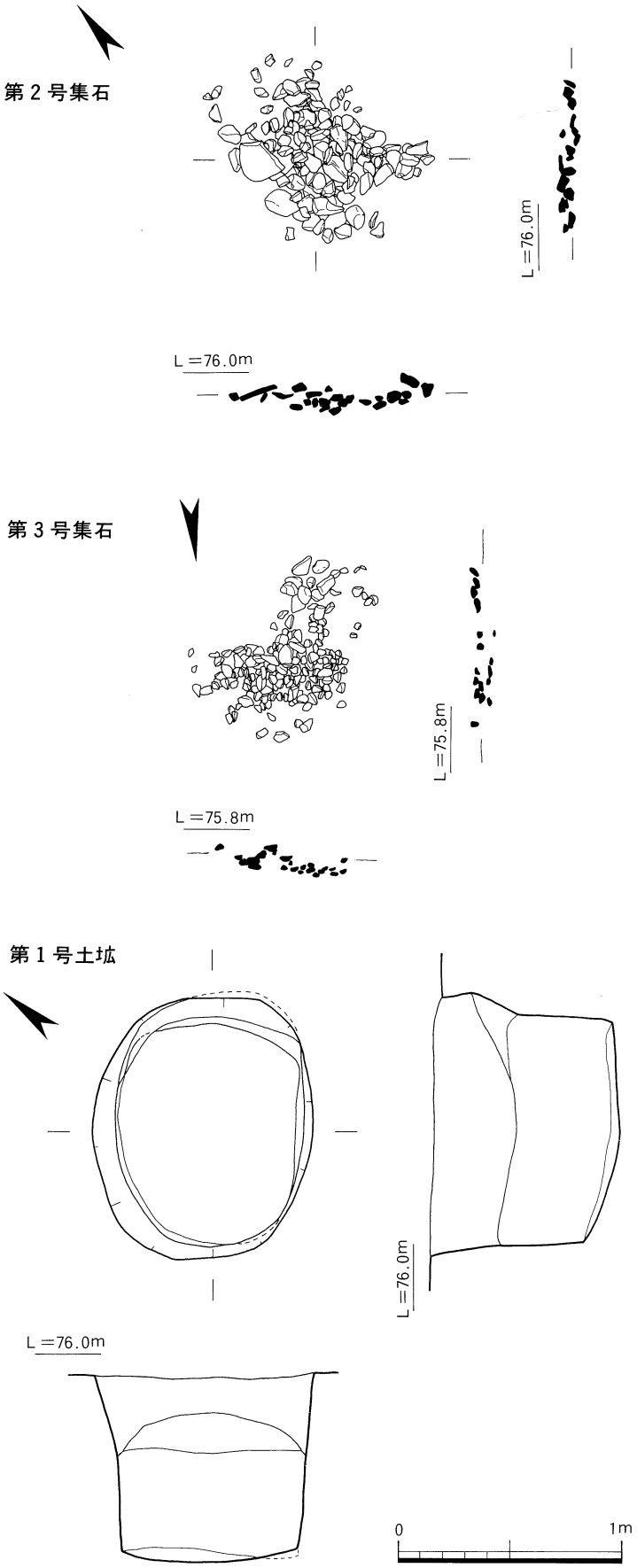
礫群

第２・３区における礫の出土状況は、大きく分けてグリットM52・N44・N46・Q44・R42の５箇所で群としてまとまって検出されている。グリットR42周辺（第18図）は、第３号集石周辺とその南側に集中している。そのほとんどは、Ⅵ層上部で検出され、第３号集石より高い位置での検出である。ほとんどの礫が熱

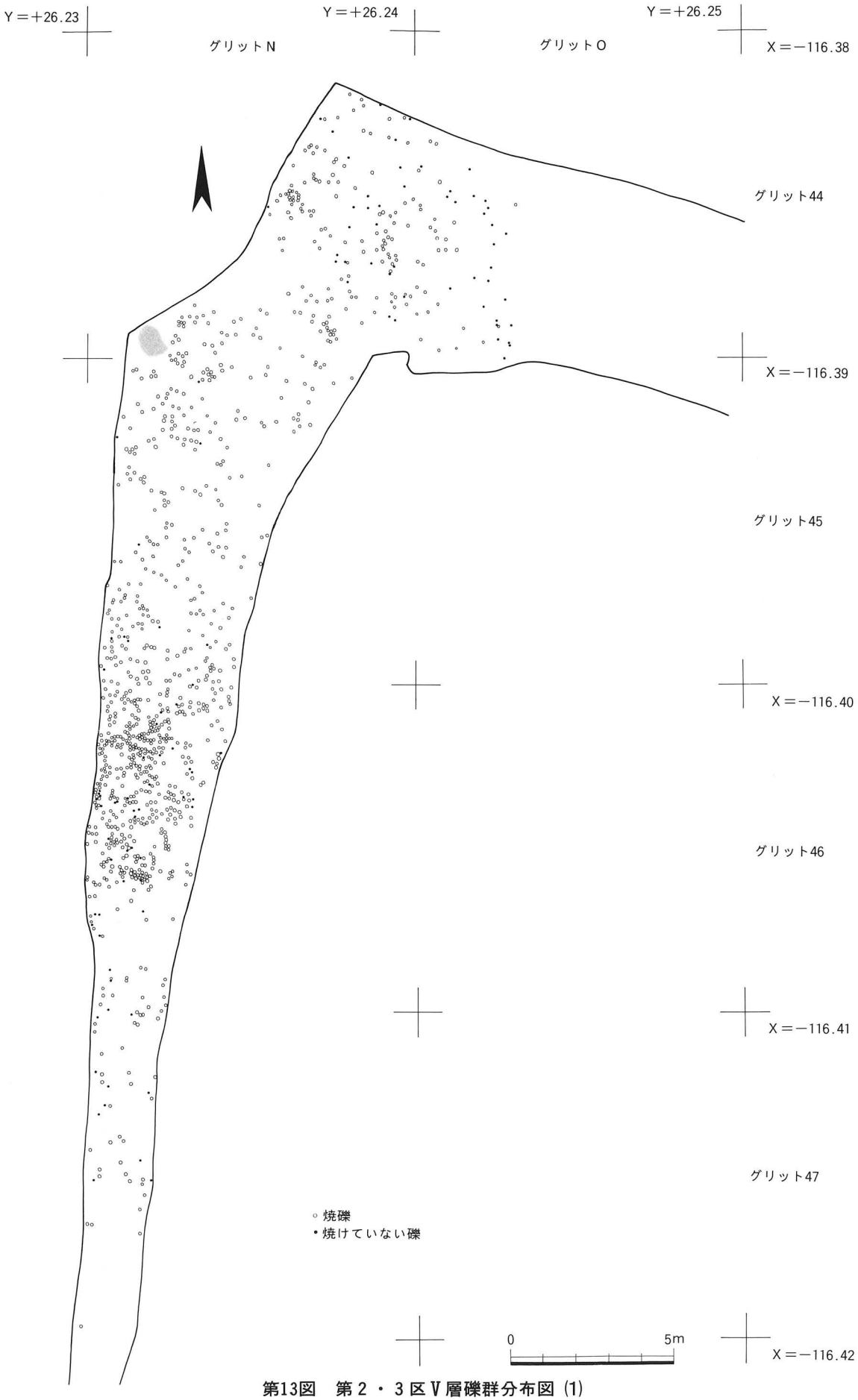
を受けており、グリットの南側での別の集石遺構の存在が予想できる。グリットQ44（第18図）は、V層の堆積がかなり薄く礫床面はV層上面となる。ここでも礫のほとんどは熱を受けているが、礫の出土状況は他のところほど密ではない。グリットN44・46（第13図）は、V層上面で検出されている。ここも礫自体熱を受けたものがほとんどで、特にグリットN46では、かなり集中して検出されたが、集石遺構として認定するほど密に重なり合うというものではなく、レベル差も0.1m程度である。グリット46から南側はだんだん礫の検出が少なくなり、グリットM48付近になると皆無の状態になる。そしてその南側のグリットM52（第17図）で再び礫の検出がみられる。ここも、礫は、熱を受けており部分的に礫の集中がみられる。

第２号集石（第12図）

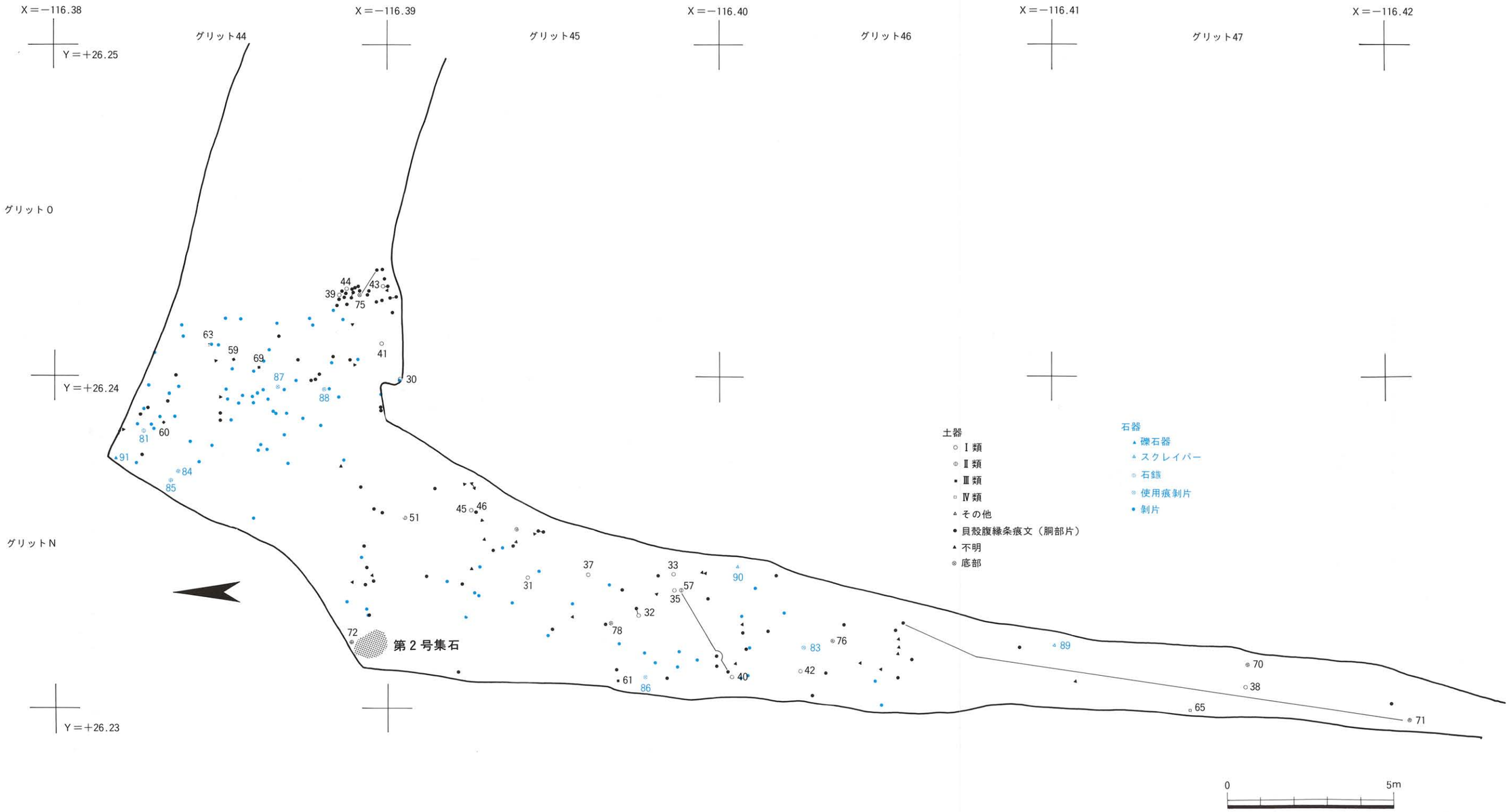
この集石遺構は、グリットN44で、周辺の礫等と同レベルで検出された。径80cm前後に礫が集積しており、掘り込みや配石は伴わない。礫自体は５～10cm大で、２～３段にしかも密に重なり合っている。ほとんどの礫は熱を強く受けており、黒色付着物がみられる。遺構上面に配石として使用したと思われる偏平な礫があること、礫と礫の間の埋土からは、炭や焼土は全く検出されていないことから廃棄礫の集積状況でないかと思われる。ただ、この偏平な礫のひとつが表面剥離があり、かなり強く



第12図　第２・３号集石、第１号土坑実測図

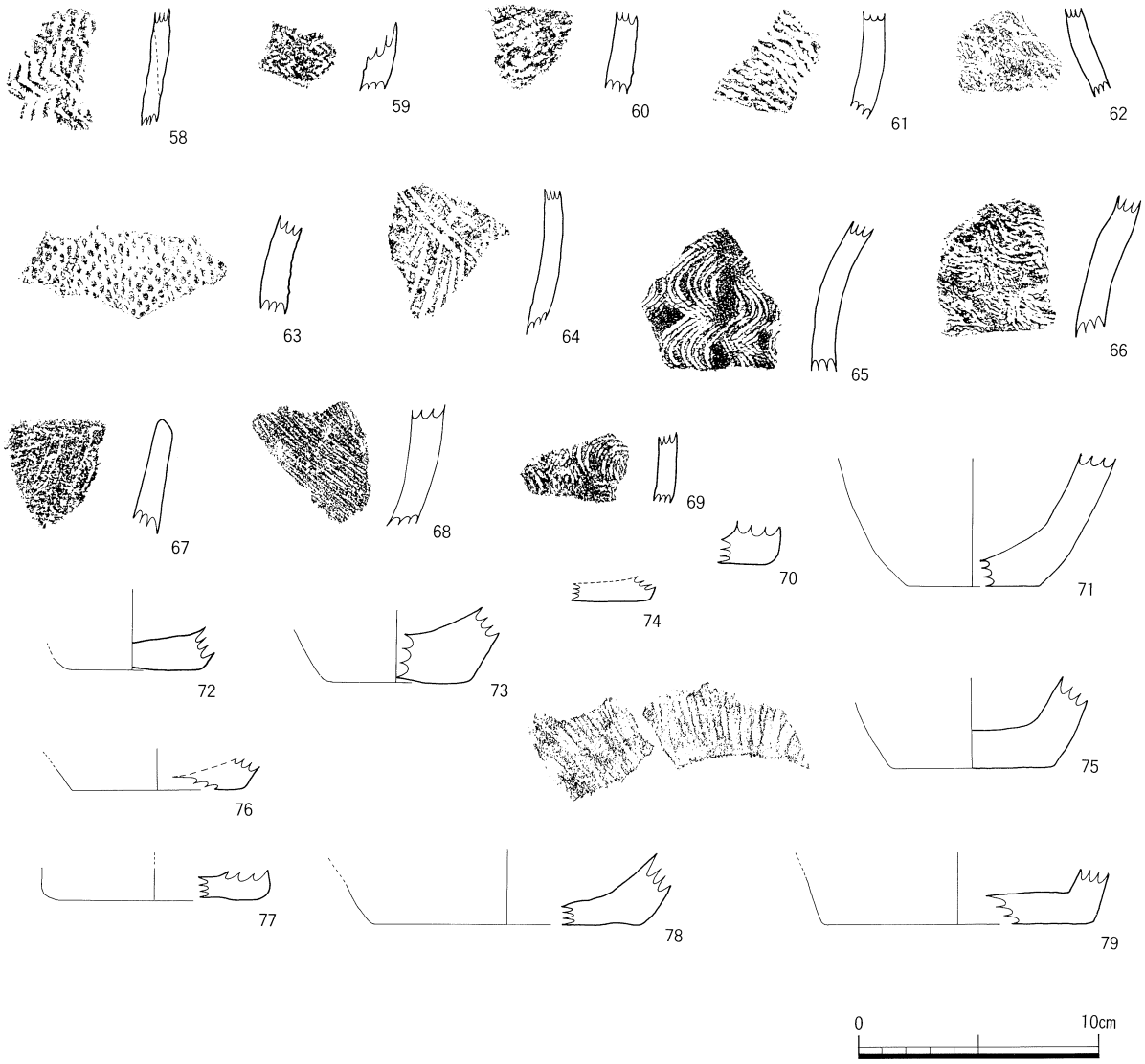


第13図　第２・３区Ⅴ層礫群分布図 (1)



第14図　第２・３区Ⅴ層遺物分布図(1)

第15図　第２・３区Ⅴ層遺物実測図 (1)



第16図　第２・３区Ⅴ層遺物実測図 (2)

熱を受けたと考えられる。この痕跡を２次使用と認めるならば、この遺構自体が火を使用したものとしての機能が考えられ、すぐそばから平底の底部片（72）が同レベルで出土している状況を考慮するとその可能性も残しておきたい。

第３号集石（第12図）

調査区の一番北側で、周辺の礫群より５～10cmほど下位（Ⅴ層下位または、Ⅵ層上面）で検出された。東西60cmの楕円形状に礫が集中する。他の集石遺構と同様に掘り込みや配石は伴わない。ほとんどの礫は熱を受けており、脆くなったものもある。礫が集中する部分は３～４段に重なっており、礫自体の大きさは５cm弱で比較的小さい礫が集中している。10cm大の礫は、礫集中部分の上部とその南隣にあり、南隣の礫は、礫集中部分からの移動礫であろう。

第１号土坑（第12図）

この遺構は、グリットＲ44のⅤ層上面で検出された。長軸1.15m、短軸1.0mの平面楕円形である。深さは、約0.8mで床面東側は平坦であるが、西側で斜面をつくる。壁の立ち上がりは、東側上部で内側にえぐり込むがしっかりした立ち上がりである。埋土は、暗黄橙色でありかなり絞まっている。

表４－１　第２・３区出土土器観察表

No.	挿図No.	図版No.	部位	文様	調整	色調 外	色調 内	焼成	胎土	備考
29	15	—	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 7.5 YR にぶい橙７/４	Hue 10 YR 褐灰５/１ 口縁内側 Hue 10 YR にぶい黄橙７/４	やや堅	透明光沢粒 黒色粒 灰褐色粒	
30	15	—	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 2.5 Y 黄８/６ 一部変色 Hue 2.5 Y にぶい黄６/３	Hue 2.5 Y 黄８/６	やや堅	黒色光沢粒 半透明光沢粒（１㎜～２㎜） 透明光沢粒	
31	15	—	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 2.5 Y 浅黄７/４	Hue 2.5 Y 浅黄７/３	堅	半透明光沢粒 灰褐色粒	
32	15	8	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 2.5 Y にぶい黄６/３	Hue 2.5 Y にぶい黄６/３ 口縁部内外 Hue 2.5 Y 浅黄７/４	堅	乳白色粒 (0.5㎜～1.5㎜) 黒色光沢粒 浅黄橙色粒多量	
33	15	—	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 10 YR 明褐色７/６	Hue 2.5 Y 浅黄７/４	粗	乳白色粒 黒色粒 透明光沢粒多量	
34	15	—	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 10 YR にぶい黄橙７/４	Hue 10 YR にぶい黄橙７/４	堅	半透明光沢粒 灰褐色粒 乳白色粒	
35	15	—	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 10 YR にぶい黄橙６/３	Hue 10 YR 浅黄橙８/４	やや堅	半透明粒（１㎜） 乳白色粒(0.5㎜～1.5㎜) 灰褐色粒 黒色粒	
36	15	8	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ミガキ	Hue 2.5 Y 浅黄７/３	Hue 2.5 Y 灰黄６/２	やや堅緻	乳白色粒 灰褐色粒	
37	15	—	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ミガキ	Hue 5 YR 橙６/８	Hue 5 YR 明赤褐５/６	やや堅緻	黒色光沢粒 透明光沢粒 灰褐色粒 乳白色粒	
38	15	8	口縁部	ヘラ状工具による刺突文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 7.5 YR にぶい橙６/４	Hue 7.5 YR にぶい橙６/４	やや堅緻	黒色光沢粒 白色光沢粒	
39	15	—	口縁部	貝殻腹縁押引文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 10 YR にぶい黄橙７/３	Hue 7.5 YR にぶい橙７/４	堅	透明粒 黒色光沢粒	
40	15	—	口縁部	貝殻腹縁押引文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 7.5 YR にぶい橙７/４	Hue 7.5 YR 浅黄橙８/４	堅	黒色光沢粒	
41	15	—	口縁部	貝殻腹縁押引文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 2.5 Y 灰黄６/２	Hue 2.5 Y 浅黄７/３ Hue 2.5 Y 黄灰５/１	堅	砂粒 白色粒	
42	15	8	口縁部	貝殻腹縁押引文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 5 YR 橙６/６	Hue 7.5 YR にぶい橙７/４	やや堅緻	白色光沢粒多量	
43	15	8	口縁部	貝殻腹縁押引文 貝殻腹縁条痕文	ミガキ	Hue 10 YR にぶい黄橙７/３ Hue 2.5 Y 灰黄６/２	Hue 10 YR にぶい黄橙7/4	やや堅緻	黒色光沢粒 半透明光沢粒 褐灰色粒 白色粒	
44	15	8	口縁部	ヘラ状工具による刺突文 貝殻腹縁条痕文	ミガキ	Hue 5 YR 灰褐５/２	Hue 5 YR 褐灰４/１	やや堅緻	黒色粒 白色粒	
45	15	8	口縁部	刻目 貝殻腹縁押引文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 7.5 YR にぶい橙６/４	Hue 7.5 YR にぶい橙７/４	やや堅緻	光沢粒	
46	15	—	胴部	貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 7.5 YR にぶい橙７/４	Hue 5 YR 橙６/６	やや堅緻	白色透明粒	
47	15	—	底部	貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 5 YR 橙６/６	Hue 7.5 YR 橙６/６	やや堅緻	黒色光沢粒 黒色粒	
48	15	8	口縁部	刻目 貝殻腹縁刺突文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 5 YR 橙６/６	Hue 5 YR 橙６/６	やや堅緻	半透明光沢粒 乳白色粒 黒色粒	クサビ形突帯
49	15	—	口縁部	刻目 貝殻腹縁押圧文線 貝殻腹縁押引文	ナデ	Hue 10 YR にぶい黄褐５/３	Hue 10 YR にぶい黄橙７/４	やや堅緻	白色粒	
50	15	8	口縁部	刻目 貝殻腹縁押圧文線 貝殻腹縁押引文	ナデ	Hue 7.5 YR にぶい褐５/４	Hue 7.5 YR にぶい褐５/４	やや堅緻	乳白色粒(0.5㎜～２㎜) 黒色粒 半透明光沢粒	
51	15	—	口縁部	刻目 貝殻腹縁押圧文線	ナデ	Hue 10 YR 灰黄褐６/２	Hue 10 YR にぶい黄橙６/４	堅	砂粒	
52	15	—	胴部	貝殻腹縁押引文	ナデ	Hue 5 YR にぶい橙６/４	Hue 7.5 YR にぶい橙６/４	堅	乳白色粒 (0.5㎜～２㎜)	

表４－２　第２・３区出土土器観察表

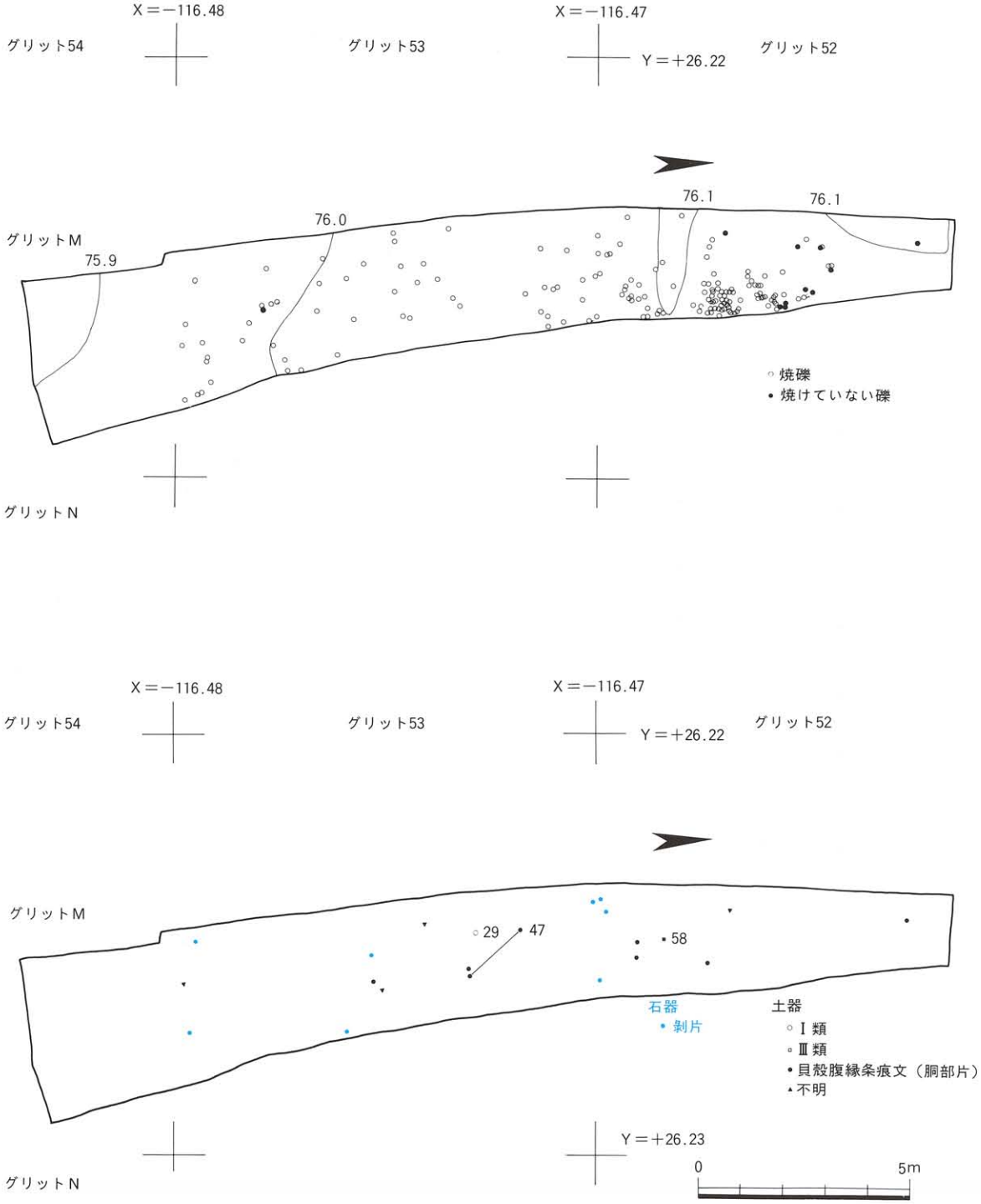
No.	挿図No.	図版No.	部位	文様	調整	色調 外	色調 内	焼成	胎土	備考
53	15	—	底部	刻線	ナデ	Hue 5 YR にぶい赤褐5/4	Hue 5 YR にぶい赤褐5/3	やや堅緻	白色粒(1㎜前後)	
54	15	—	胴部	貝殻腹縁押引文	ナデ	Hue 7.5 YR にぶい橙6/4	Hue 7.5 YR にぶい褐5/3	堅	白色光沢粒(1㎜前後) 白色粒	
55	15	—	胴部	貝殻腹縁押引文	ナデ	Hue 10 YR にぶい黄橙6/4	Hue 10 YR にぶい黄褐5/3	やや堅	乳白色粒(0.5㎜～2㎜) 茶褐色光沢粒	
56	15	—	胴部	貝殻腹縁押引文	ナデ	Hue 7.5 YR 褐4/6	Hue 7.5 YR にぶい橙6/4 一部 Hue 10 YR 褐灰4/1	堅	乳白色粒(0.5㎜～2㎜)	
57	15	—	胴部	貝殻腹縁押引文 貝殻腹縁条痕文	ナデ	Hue 5 YR にぶい橙6/4	Hue 7.5 YR にぶい褐6/3	堅	白色粒	
58	16	—	胴部	山形押型文	ナデ	Hue 2.5 Y 浅黄7/3 Hue 2.5 Y 灰黄6/2	Hue 2.5 Y 浅黄7/3	やや堅	黒色粒 乳白色粒(1㎜～3㎜)	
59	16	—	胴部	山形押型文	ナデ	Hue 5 YR にぶい橙6/4	Hue 7.5 YR にぶい橙6/4	堅	茶色粒(2㎜～3㎜)	
60	16	—	胴部	山形押型文	ナデ	Hue 7.5 YR にぶい橙6/4	Hue 7.5 YR にぶい橙7/3	やや堅	白色粒(0.05㎜～3㎜) 黒色粒 光沢粒	
61	16	8	胴部	山形押型文	ナデ	Hue 10 YR 浅黄橙8/4	Hue 10 YR 浅黄橙8/3	やや堅緻	黒色光沢粒 白色粒	
62	16	9	胴部	撚糸文	ナデ	Hue 10 YR にぶい黄橙7/4	Hue 10 YR にぶい黄橙6/4	やや堅	乳白色粒 茶褐色粒	
63	16	8	胴部	楕円押型文	ナデ	Hue 10 YR にぶい黄橙7/3 Hue 10 YR 灰黄褐5/2	Hue 10 YR にぶい黄橙7/4	やや堅緻	黒色光沢粒	
64	16	9	胴部	沈線文	ナデ	Hue 7.5 YR 橙7/6	Hue 10 YR にぶい黄橙7/3	やや堅	乳白色粒(0.5㎜～2㎜) 灰褐色粒 黒褐色粒 半透明光沢粒	
65	16	8	口縁部	変形撚糸文	ナデ	Hue 10 YR にぶい黄橙6/3 Hue 10 YR にぶい黄褐5/3	Hue 10 YR にぶい黄橙7/4	堅	黒色光沢粒 乳白色粒	
66	16	8	胴部	撚糸文	ナデ ケズリ風ナデ	Hue 10 YR にぶい黄褐5/4	Hue 10 YR 灰黄褐5/2	やや堅緻	白色粒多量 半透明粒多量	
67	16	—	口縁部	細線文	ナデ	Hue 10 YR にぶい黄橙7/4	Hue 2.5 Y 浅黄7/4	堅	黒色粒 黒色光沢粒 白色粒	
68	16	9	胴部	細線文	ナデ	Hue 5 YR にぶい橙7/4	Hue 7.5 YR にぶい橙7/3	堅	透明感 白色粒 砂粒	
69	16	—	胴部	山形押型文	ナデ	Hue 7.5 YR にぶい橙7/4	Hue 7.5 YR にぶい橙6/4	やや堅緻	砂粒	
70	16	—	底部	――――	ナデ	Hue 10 YR にぶい黄橙7/3	Hue 2.5 Y 灰黄6/2	堅	白色光沢粒 灰色粒	
71	16	—	底部	――――	ナデ	Hue 7.5 YR 橙7/6	Hue 10 YR にぶい黄橙7/3	堅	白色半透明粒	
72	16	—	底部	――――	ナデ	Hue 2.5 Y 浅黄7/3	Hue 2.5 Y 灰黄6/2	堅	白色粒	
73	16	—	底部	――――	ナデ	Hue 2.5 Y 浅黄7/4	Hue 2.5 Y 灰黄6/2～ 淡黄8/4	堅	白色光沢粒	
74	16	—	底部	――――	ナデ	Hue 2.5 Y 黄灰5/1	Hue 10 YR にぶい黄橙6/4	堅	乳白色粒(0.5㎜～2㎜)	
75	16	—	底部	――――	ミガキ	Hue 7.5 YR にぶい橙7/4	Hue 7.5 YR にぶい褐6/3	やや堅緻	黒色砂粒	
76	16	—	底部	――――	ナデ	Hue 10 YR にぶい黄橙7/4	Hue 10 YR にぶい黄橙6/3	堅	白色粒 黒色粒 半透明光沢粒	
77	16	—	底部	――――	ナデ	Hue 7.5 YR にぶい橙7/4	Hue 10 YR にぶい黄橙7/3	堅	黒色粒	
78	16	—	底部	――――	ナデ	(底) Hue 10 YR 浅黄橙8/4 (外) Hue 10 YR 浅黄橙8/4	Hue 2.5 Y 浅黄7/3	堅	白色粒 乳白色粒 半透明光沢粒 黒色粒	
79	16	—	底部	――――	ナデ	Hue 7.5 YR 橙7/6	Hue 7.5 YR 橙6/6	堅	浅黄色粒	

b 遺物

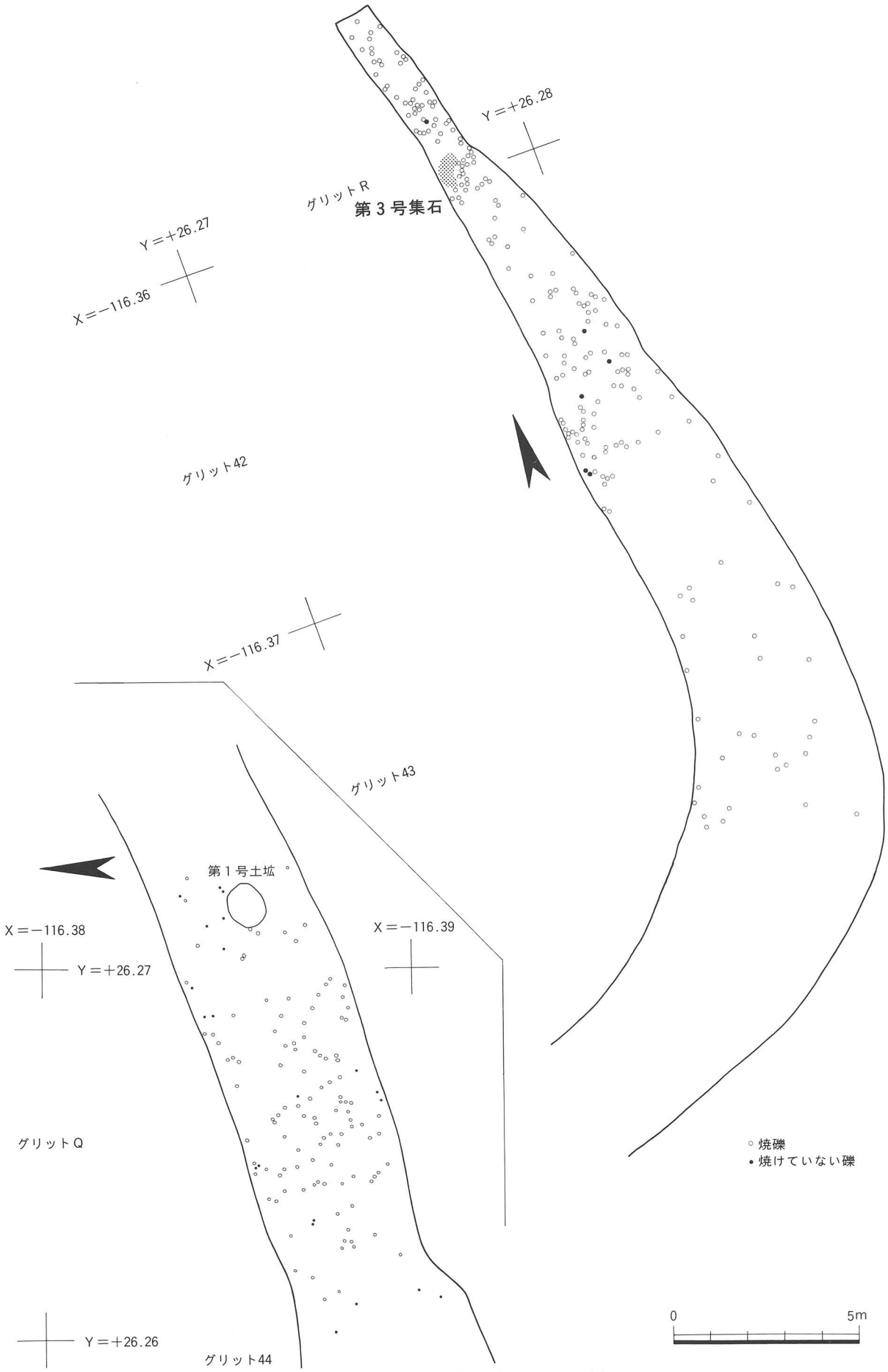
土器（第15・16図）

Ⅰ類（29～45）

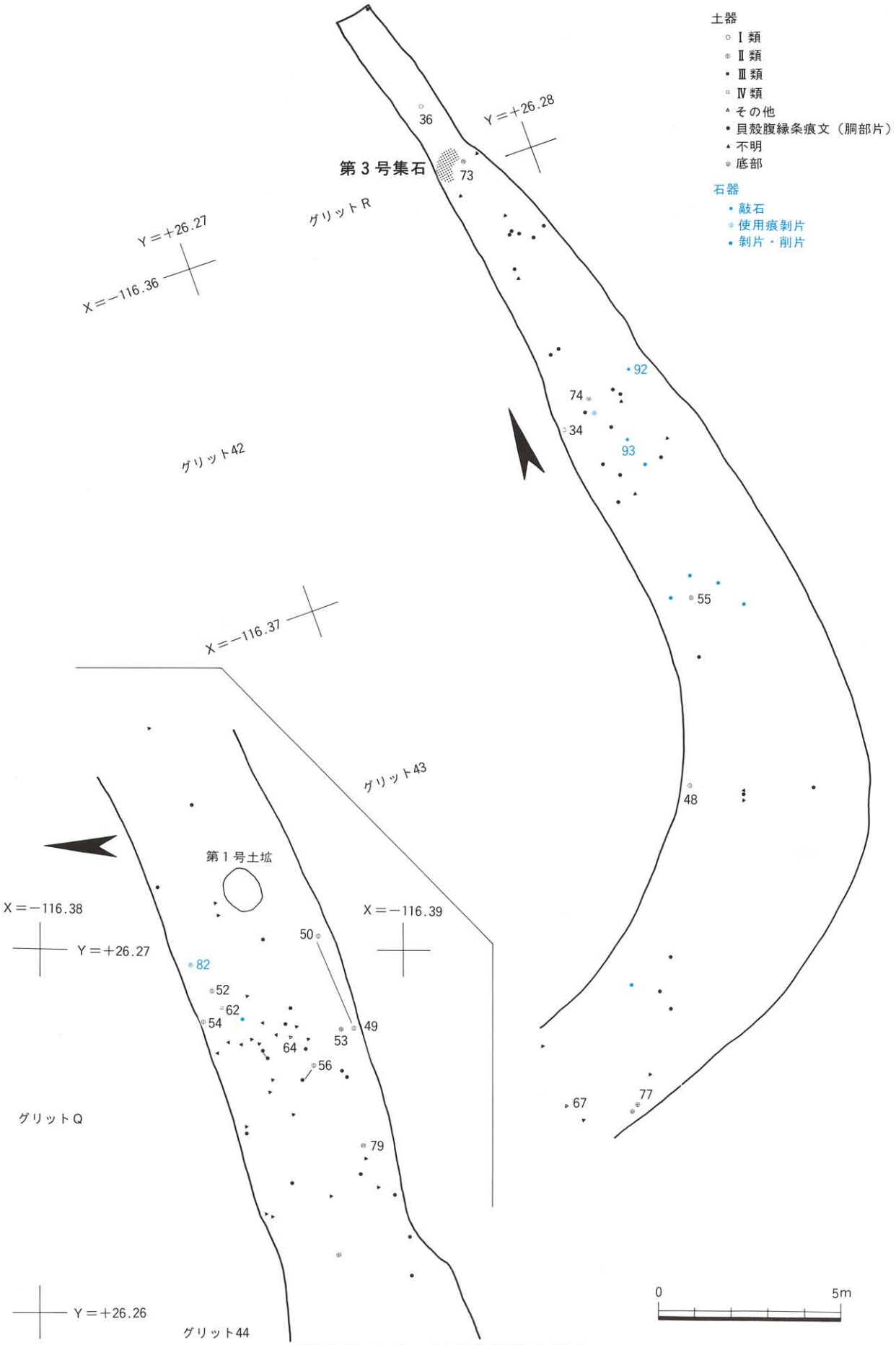
口縁部の文様や施文手法で細分することができる。



第17図　第２・３区Ⅴ層礫群・遺物分布図



第18図　第２・３区Ⅴ層礫群分布図 (2)



第19図　第2・3区Ⅴ層遺物分布図

ａ類（29・30）　口縁端部に縦位の貝殻腹縁刺突文を施すもの。29は、口縁端部がやや細くなり、内面が剥離されている。

ｂ類（31～37）　貝殻腹縁で口縁部横に縦位または斜位に刺突するもので、口唇部は刻目はなく平坦である。32・36・37は、貝殻腹縁条痕文を地文として貝殻腹縁刺突文を施す。

ｃ類（38）篦状のもので口縁部横に縦位で刺突する。口縁端部は平坦である。

ｄ類（39～43）口縁部横に押引文を施す。貝殻腹縁を縦位に用いて左から右に連続して押引く文様である。貝殻腹縁で刺突する代わりに、押引きの手法を用いている。ａ～ｃ類と同様に、丁寧な貝殻腹縁条痕文を地文に口縁部に文様を施している。

ｅ類（44）篦状のもので横位に３段平行に刺突文を巡らす。視的には、ｄ類と同じ効果をもたらすものである。条痕は横方向で浅い。

ｆ類（45）口唇部は刻目がみられ、口縁部横に横位の貝殻腹縁による上から下方向への押引文を２段平行に施す。

Ⅱ類（48～57）

文様手法により分類される。

ａ類（48）口縁部のみである。口唇部は刻目をもち、口縁部に貝殻腹縁刺突文、その下に条痕文を施す。刺突文から下にクサビ状突帯が幅狭く貼り付いている。そしてクサビ状突帯の両際を篦状のもので調整している。

ｂ類（49～57）49・50は、口唇部に斜め方向の刻目をもち、貝殻腹縁の押圧文線と横位の上から下への押引文を交互平行に２段施し、その下に横位の貝殻腹縁の押圧文を２段平行に施す。その下胴部は、左から右への押引文を施す。この２固体は接合しないが、同一固体と思われる。53は、底部片で縦方向の条痕があり胎土・焼成が吉田系のものに似ていることからここに分類した。57は、押引文を施す胴部片で、部分的に押引文にならず条痕文となっているところを残す。

Ⅲ類（58～61・63・69）

63は、楕円形押型文で、他は山形押型文である。58～60は、縦位の山形押型文である。69は、山形押型文が崩れたもので「手向山式」に属すると思われる。

Ⅳ類（62・65・66）

撚糸文を施す土器である。62は頸部あたりで、壺形になる可能性がある。65は、縦の変形撚糸文である。

その他

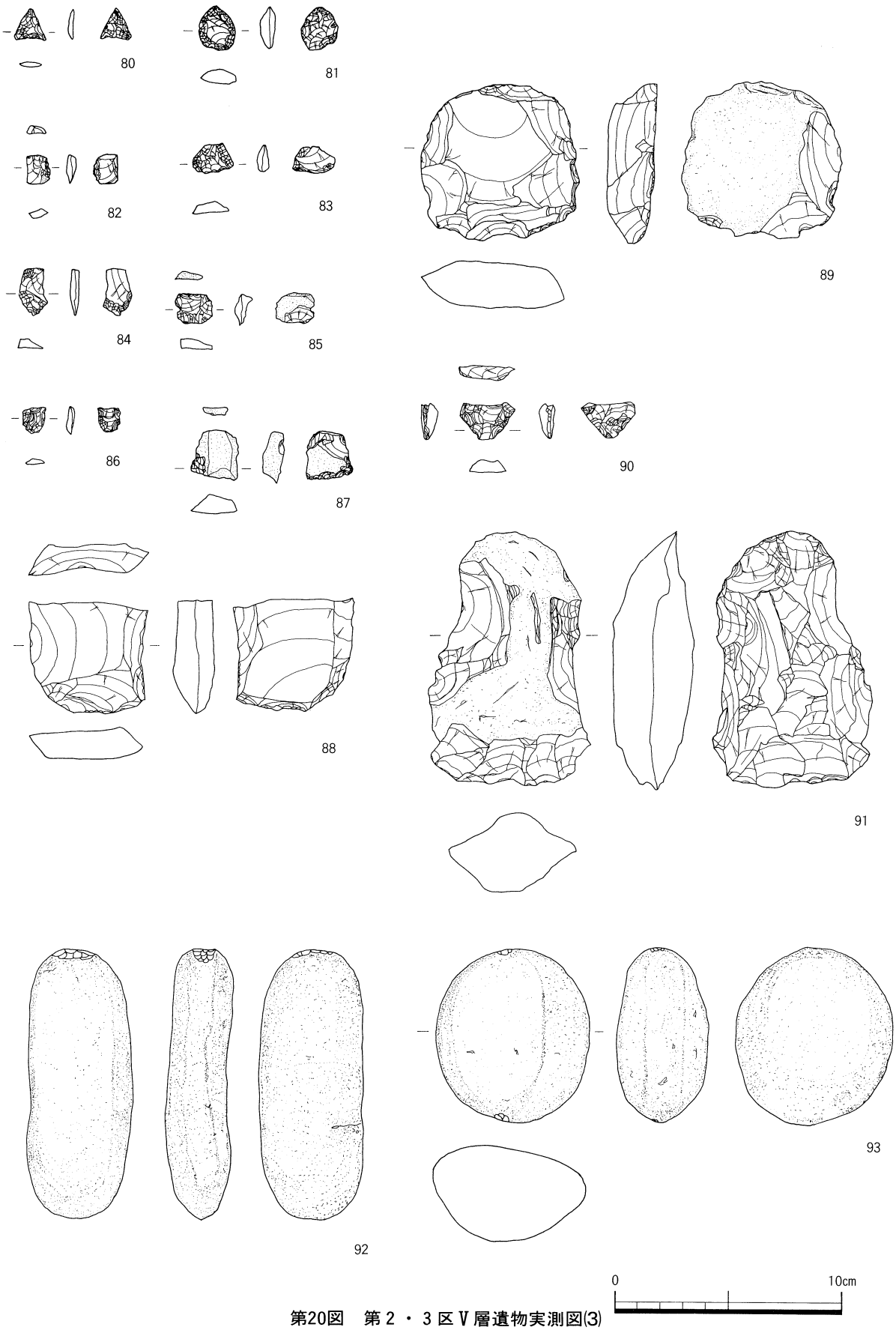
64は沈線文系で沈線が雑で不規則である。67・68は細線文系である。47・53・70～79は、底部としてまとめた。すべて平底である。47は、条痕文を胴部下端まで施す。72は第２号集石側で出土した。出土底部のほとんどは、丁寧な調整で74・75は、底部外面も含めて明確なミガキの痕跡がみられる。尚、72以外は復原底径である。

石器（第20図）

２・３区の石器は、器種や石材などでは、１区の状況と同様である。

石鏃（80・81）

すべて黒曜石である。80は三角形状で左側縁下端部が欠損している。81は両面に調整を施す。表面は刃部調整を施し裏面は粗雑である。



第20図　第２・３区Ⅴ層遺物実測図(3)

表5　第2・3区出土石器観察表

No.	挿図No.	図版No.	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	石　材	備　考
80	20	9	石　鏃	1.4	1.4	0.2	0.5	H類-5	
81	20	—	石　鏃	1.9	1.6	0.7	2	H類-2	
82	20	—	使用痕剥片	1.2	1.0	0.4	1	H類-4	
83	20	—	使用痕剥片	1.2	1.6	0.5	1.5	H類-4	
84	20	—	使用痕剥片	2.1	1.3	0.4	1.5	H類-6	
85	20	—	使用痕剥片	1.3	1.7	0.7	1	H類-4	
86	20	—	使用痕剥片	1.2	1.0	0.2	0.3	H類-6	
87	20	—	使用痕剥片	2.2	2.0	0.9	3.5	H類-6	
88	20	—	使用痕剥片	5.0	5.3	2.0	60	E類	
89	20	—	スクレイパー	7.1	7.1	2.0	114	C類	
90	20	—	スクレイパー	1.6	2.5	0.7	2.5	H類-3	
91	20	9	礫石器	11.2	6.9	3.9	282.5	F類	
92	20	—	敲石	11.9	4.5	2.8	253	A類	
93	20	—	敲石	7.7	6.9	4.1	312	A類	

使用痕剥片（82～88）

88以外は、すべて黒曜石を使用している。82は右側縁に半弧状の微小剥離痕が認められる。83・84は不定形な剥片を素材とし、83は右側縁や下端部に長方形状の、84は下端部に半弧状のそれぞれ微小剥離痕が認められる。85は右側縁下端部に三日月状の微小剥離痕が認められる。

86は左側縁に台形状の微小剥離痕が認められる。87は下端部に半弧状の微小剥離痕が認められ、素材として剥離された時の打面部を残す。

88は大形で不定形な剥片を素材にし、下端部に三日月状の微小剥離痕が認められる。上部は欠損している。

スクレイパー（89・90）

89は、頁岩を使用している。裏面に素材時の自然面を残し、左側縁に刃部調整を行っている。90は黒曜石を使用し、上部が欠損している。調整を施すが上部両端は弱い。

礫石器（91）

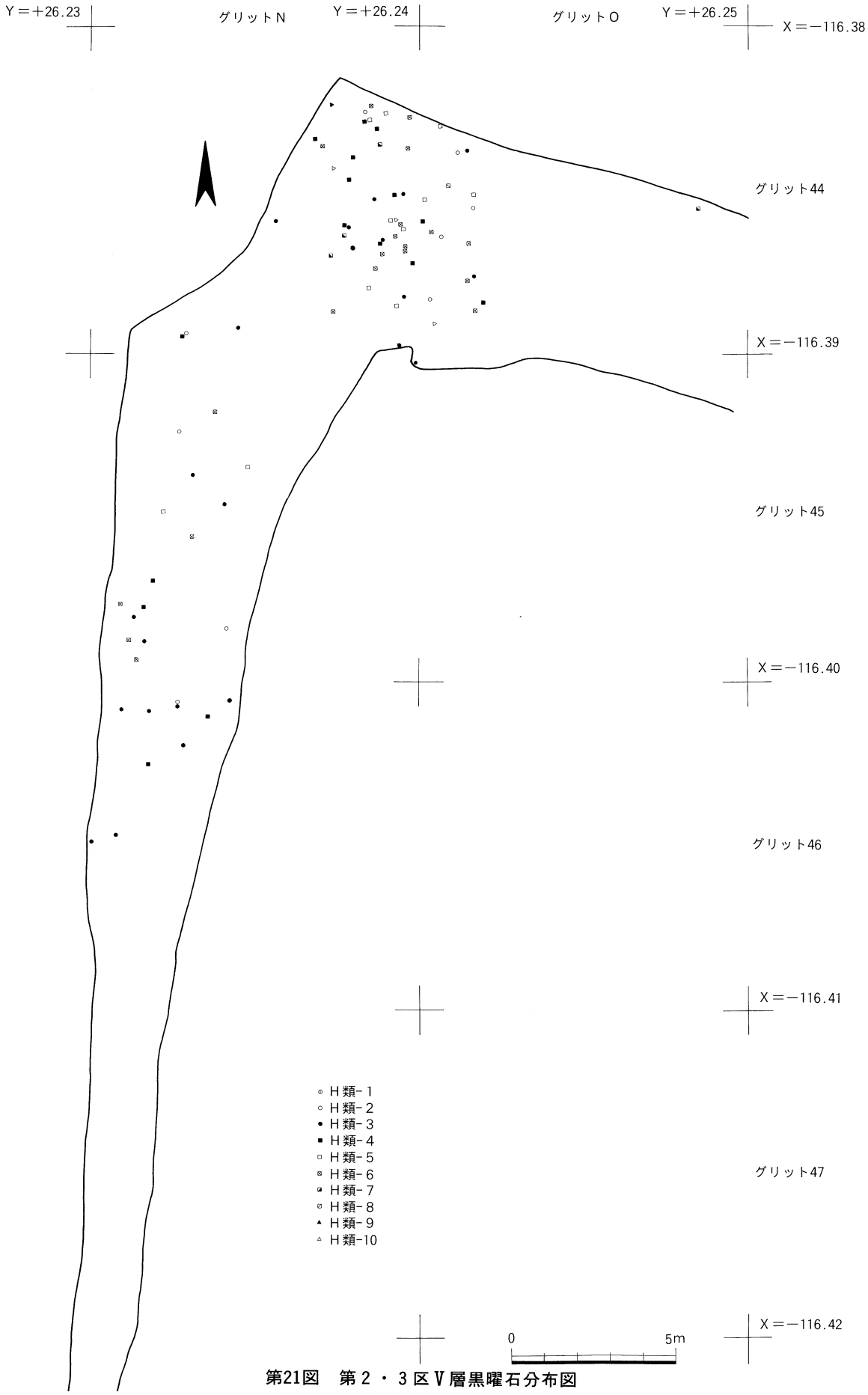
チャートを石材とし、風化したような状態である。両面に剥離痕がみられる。

敲石（92・93）

石材は砂岩を素材として用いている。円礫を素材として用いており、上部に敲打痕が認められる。

分布状況

出土遺物は、土器270点、石器128点である。平面分布をみると、土器は、胴部に貝殻腹縁条痕文を施すものが全体に散布している。Ⅰ類は、北側では2点のみ確認されただけで、南側で顕著である。なかでもⅠ類－bはグリットN45南側（第14図）に集中し、Ⅰ類－dはグリットO44南側に集中している。Ⅱ類は、Ⅰ類とは反対にグリットQ44（第19図）より北側に分布し、特にⅡ類－bは、グリットQ44に集中している。押引きの手法で文様を施すⅠ類－dはⅠ類－bとⅡ類－bを結ぶ線の中間に分布する位置関係である。Ⅳ類や沈線文、細線文系の土器はⅡ類の周辺もしくは北側に分布している。石器は、グリットN44より南側に分布しており特にグリットN44～46に集中する。黒曜石の剥片や削片がほとんどで、グリットN・O44にH類－4～6が集中しており、グリットN46には、H類－3の散布が多くみられる（第21図）。製品は、敲石がグリットS42で出土している。



第21図　第２・３区Ⅴ層黒曜石分布図

2　近世の遺構・遺物

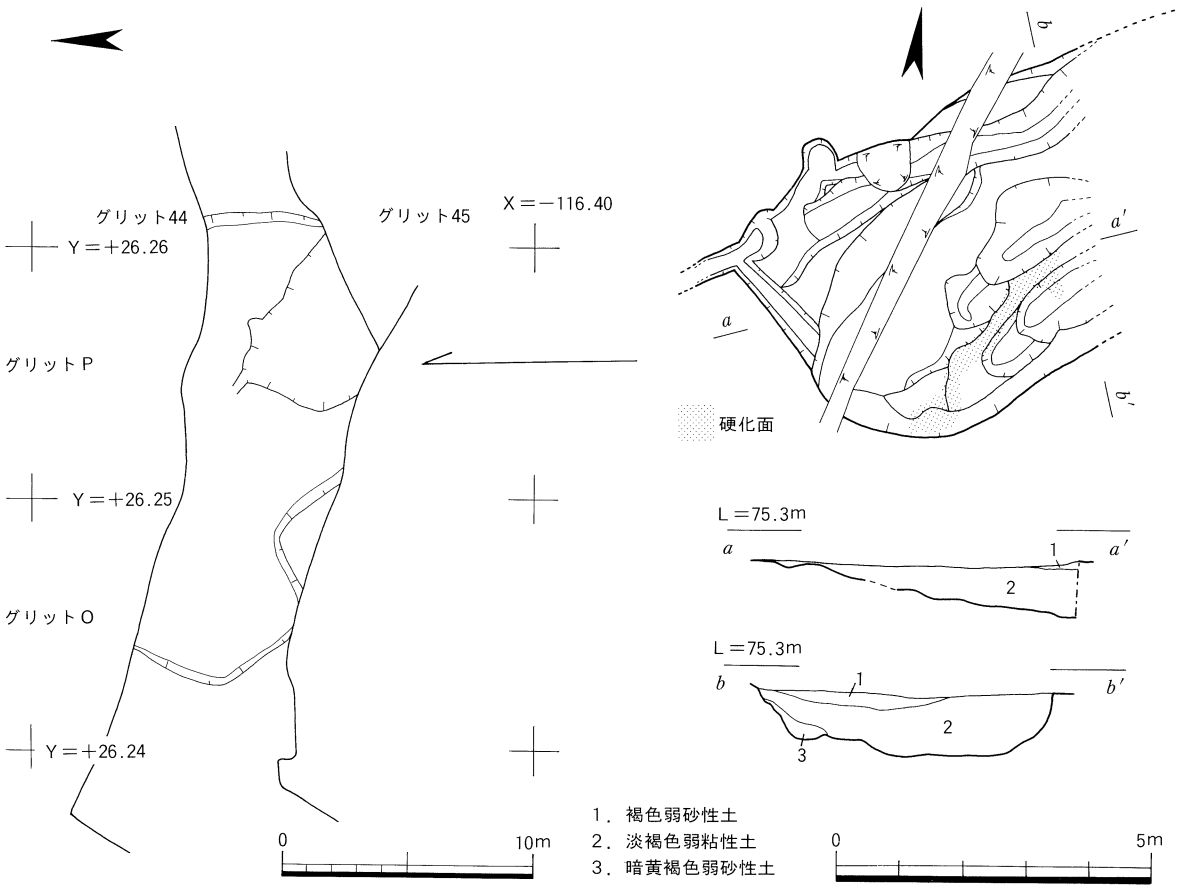
遺跡のある台地の東側急斜面に人が通れるほどの通路があり、東部の高岡麓地区から西の赤谷地区へ抜け去川へと続く江戸時代の薩摩街道の一部であると言われている。その通路の台地東側の上がりきったところが調査区内に含まれている。この通路は、斜面を断面V字状にカットし、床面は人間が離合できる程度の幅しかなく、雨天時にはそこが排水路の用をなし通行はかなり険しい。しかし、地元では戦前までは、通学路として使われていたと言うことであった。

a 遺構

通路状遺構（第22図）

グリットP44に位置する。遺構周辺はV層下部まで削平されており、この遺構に伴うものと思われこの落ち込みは北西側に延びている。台地の平坦部は、通路床面も広く平坦で、斜面のところのみ狭くて歩きにくい。上がりきるところは雨水による何条かの自然流路が形成され、その流路間のレベルの高いところで硬化面が認められ、踏み固められたものと思われる。

遺物は、周辺から銅銭（不明）が出土している。



第22図　通路状遺構実測図

Ⅳ まとめ

この遺跡の特徴と今回の調査で派生した問題点を揚げることでまとめとしたい。

この遺跡は、アカホヤの下にあるⅤ層に遺物包含層をもつ縄文早期の遺跡である。１区～３区の出土状況をみるかぎり、同じような特徴がこの台地全体に広がって分布していると思われる。

この遺跡の出土遺物のほとんどは縄文早期と思われ[1]、集計すると表－６のとおりである。

土器では、Ⅰ類が最も多く、続いてⅡ類、Ⅲ類といった具合である。貝殻腹縁条痕文を施す胴部片も多くⅠ類に属するものがほとんどであろう。器形は、円筒系平底がほとんどで、角筒形は２～３点である。Ⅰ類は文様手法等で細分されるものの前平系「前平式」、Ⅱ類は吉田系でａが「知覧式[2]」、ｂは「吉田式」である。Ⅲ類は押型文系、Ⅳ類は撚糸文系にそれぞれ比定される。その他に細線文系、沈線文系、条痕文系等が出土したが、Ⅰ・Ⅱ類以外は数的には少なく、Ⅰ・Ⅱ類である貝殻文系のなかの、特に「前平式」を中心とする時期の遺跡であるといえる。Ⅰ類－ａは同じ前平系の「岩本式」に近い特徴をもち、Ⅰ類－ｄ・ｆは口縁部文様に押引きの手法を用いⅡ類－ｂに近い特徴をもつ。Ⅰ類－ｄは田野町札ノ元遺跡[3]でもみられる。Ⅱ類はⅠ類と比べて胎土に明らかな違いがありこの遺跡の中にあっては異質なものを感じる。Ⅲ類は「手向山式」が２点出土しているが同一固体と思われる。Ⅳ類の撚糸文系のもののなかには壺形になりそうなものもある。また、「石峰式」と思われるものが１点出土した。「石峰式」は県内では串間市猪之椪遺跡[5]で出土している。

表６　橋上遺跡出土遺物集計表

		Ⅰ						Ⅱ		Ⅲ			Ⅳ	その他	条痕文（胴部）	無文	不明	計
		a	b	c	d	e	f	a	b	山形	楕円	手向山						
1区	口縁部	1	5						2					1				9
	胴部								2						49	40		91
	底部														2	1		3
	小計	1	5						4					1	51	41		103
2・3区	口縁部	2	7	1	5	1	1	1	3				2	1				24
	胴部								5	4	1	2	1	2	146	72		233
	底部								1						2	10		13
	小計	2	7	1	5	1	1	1	9	4	1	2	3	3	148	82		270
合計		3	12	1	5	1	1	1	13	4	1	2	3	4	199	123		373

		A	B	C	D	E	F	G	H										
									1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
1区	石鏃								1			2		2					5
	使用痕剥片										1		2			1			4
	スクレイパー				1														1
	小型摩製石斧		2																2
	敲石	2																	2
	剥片	1		2	1	6		1		2	22	1	8	4	2	4	1		55
	計	3	2	2	2	6		1	1	2	23	3	10	6	2	5	1		69
2・3区	石鏃									1			1						2
	使用痕剥片					1						3		3					7
	スクレイパー			1							1								2
	礫石器						1												1
	敲石	2																	2
	剥片	6		8	2	3	1	2	1	7	25	17	14	19	4	1	1	3	114
	計	8		9	2	4	2	2	1	8	26	20	15	22	4	1	1	3	128
合計		11	2	11	4	10	2	3	2	10	49	23	25	28	6	6	2	3	197

石器は、製品となるものが少なく、石鏃等の狩猟用具の他には、スクレイパー・敲石・小型石斧等の調理・制作工具が数点出土している。小型石斧は、丁寧に磨いた刃部調整をみるかぎり、ノミ形石器としての用途が考えられる[6]。石材についてみると黒曜石が圧倒的に多いのがわかる。黒曜石は、この遺跡の場合剥片として出土する場合が多く、剥片自体の形や大きさは様々（小剥片が多い）である。肉眼観察においては、剥片における観察面の制約があり、同じ剥片でも観察面が違えばやや異なる特徴を示す。逆に言えば、見た目に特徴が違う剥片・削片が同じ原石である可能性もある。そのため、それぞれの剥片を特徴ごとに分類し、各

産地の黒曜石の特徴をもとにして産地同定を試みたが、大分県の姫島産以外は鹿児島県の桑ノ木津留や日東産に類似するもの[7]が多くみられるというものであった。また、同じ資料に対し蛍光X線分析を行い比較を試みたが、分析結果が間に合わなかったためそれらの関係については別の機会としたい。

製品に使用した石材は、石鏃やスクレイパーなどは、黒曜石や頁岩が使用され、敲石は、砂岩が使用されている。石鏃の数量が少ない割には、製作材料である黒曜石の剥片が多いのは、小剥片が廃棄的意味あいのものなら石鏃が狩猟に使用された後の痕跡であり、それが製作段階のものであっても需要が多かったことには変わりなく、何れにしても狩猟を主とした集団であることがいえよう。

縄文早期の包含層を調査すると、必ずと言ってよいほど礫群に遭遇する。礫群の中には礫自体が熱を受けたもの（焼礫）と熱を受けていない礫に分けることができる。その分布状況をみると、２・３区ではほとんどが焼石でいくつかのまとまりをもって分布している。また、それを遺物の分布状況と照らし合わせてみると、遺物等の若干の移動はあるということを考慮しても、場所や数量などだいたい比例する関係がみられる。ただし、そのようなまとまりがみられるところを生活痕跡と断定するには、礫群と集石遺構との関係や焼礫とそうでない礫との関係、さらには集石遺構自体の性格と構造等をも考慮する必要があろう。炉としての可能性がある第２・３号集石遺構の周りには、遺構よりもやや高いレベルで焼礫の散布がみられることが確認されたが、検出された集石遺構の数量と、そして集石遺構の検出場所が何れも調査区隅という条件下では、これ以上言及はできない。礫自体は砂岩質など自然石の拳大前後ものが多くみられる。

以上、この遺跡は、留ヶ宇戸遺跡[8]等と同じように縄文早期の「前平式」期を中心としており、この遺跡の出土土器形式をはじめ、小型の磨製石斧を含めた石器組成と鹿児島方面からの黒曜石搬入など、南九州の縄文早期文化圏に十分当てはまるものといえよう。

註

(1) 新東晃一　1989　「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観１』　小学館
(2) 加栗山タイプといわれているものである。
(3) 面高哲郎編　1986　「札ノ元遺跡」『田野町文化財調査報告書第３集』　田野町教育委員会
(4) 河口貞徳　1965「石峰遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書第12集』　鹿児島県教育委員会
(5) 長津宗重　1987　「猪ノ椪遺跡」　串間市教育委員会
(6) 橘昌信氏の御教授による。
(7) 宍戸章氏の御指導による。
(8) 吉本正典　1994　「留ヶ宇戸遺跡」『串間市文化財調査報告書第11集』

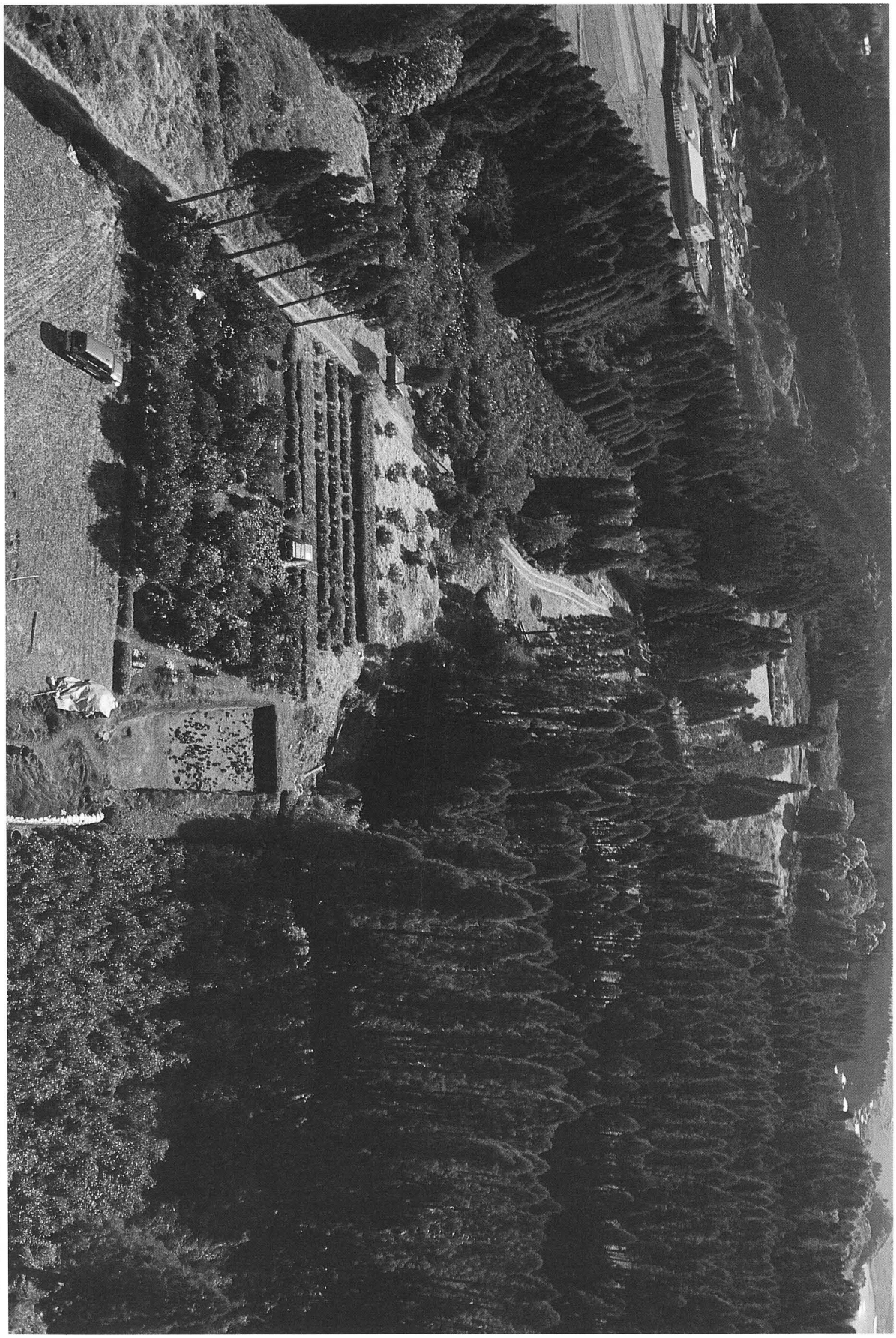
図　　版

図版 1

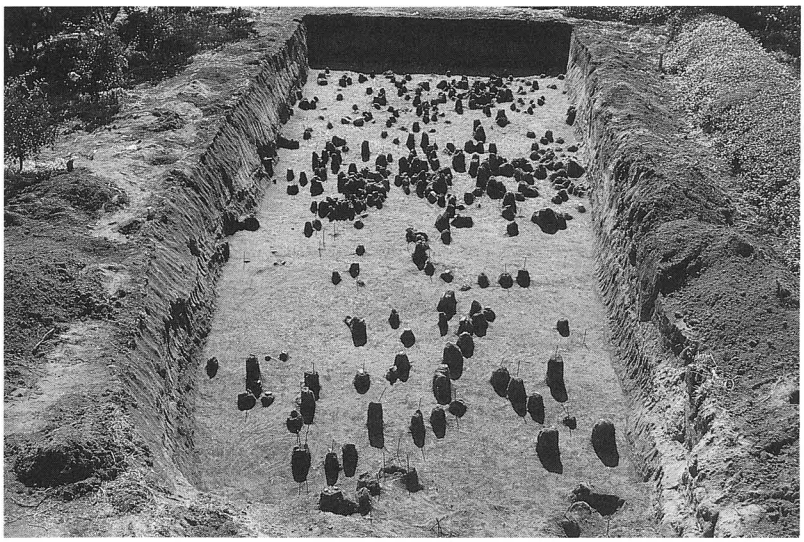
遺跡遠景（北東側から）

遺跡遠景（東側から）

図版 2



遺跡全景（北側から）



第１区Ｖ層全景（北側から）

第１号集石（北側から）

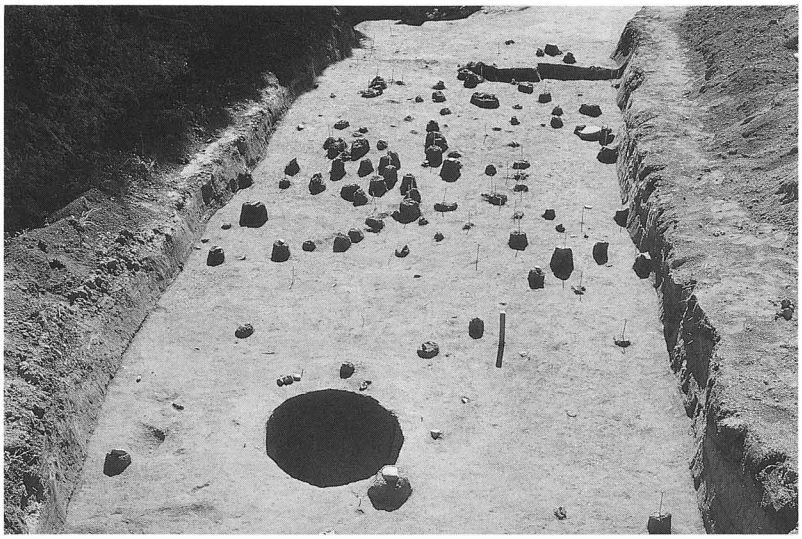
第１区Ｖ層遺物（No.25）出土状況

図版 4

第１区Ⅱ層溝状遺構（北側から）

第２・３区（グリットNo.45）
Ⅴ層全景

第２・３区（グリットNo.44）
Ⅴ層全景



第２・３区（グリットQ45）
Ｖ層全景

第２・３区（グリットR42）
Ｖ層全景

第２号集石（南側から）

図版 6

第３号集石（南側から）

第１号土坑（北側から）

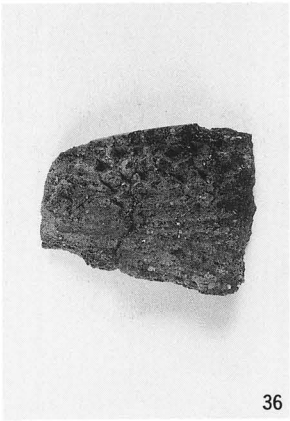
通路状遺構（西側から）

図版 7

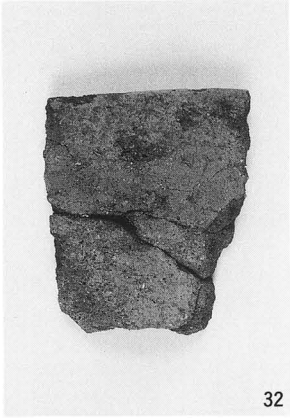
第3区全景（空撮）

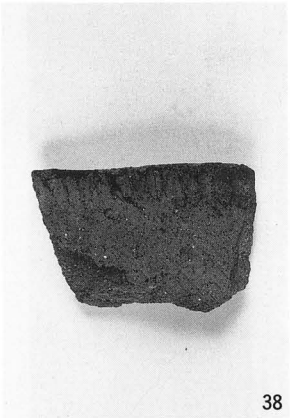
図版 8

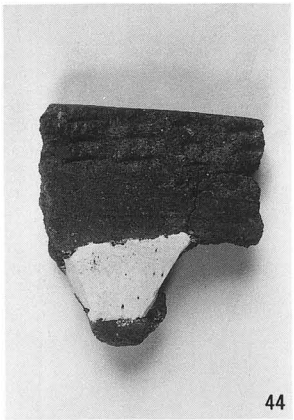
3

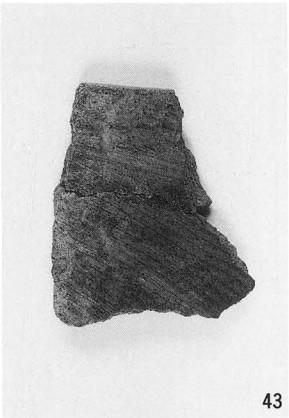

36

1


32


38


44

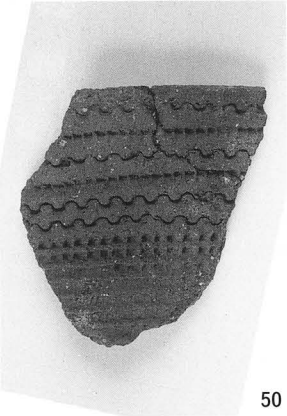

43

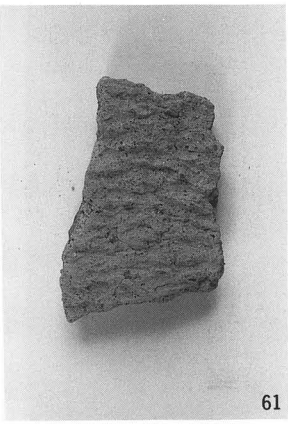
42

45

9

48


50


61

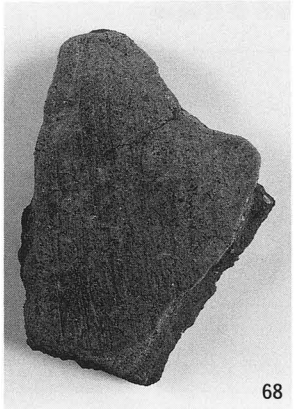
63

65

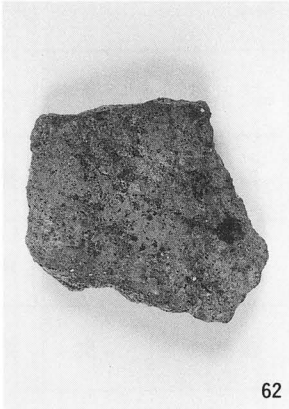
66

出土遺物 (1)

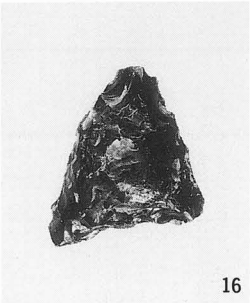
12

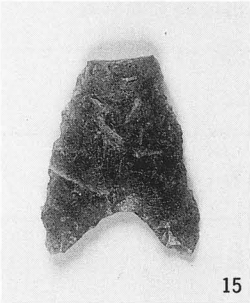

68

64


62

80


16

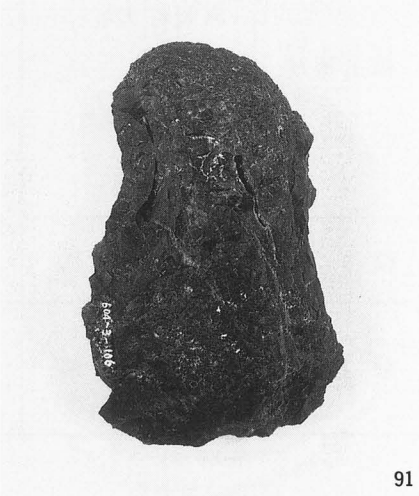

15

24

26

89

25


91

出土遺物 (2)

表7　橋上遺跡報告書登録表

フリガナ	ハシカミ
書名	橋上遺跡
副書名	県営一般農道整備事業伊勢ノ原地区に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	第1集
シリーズ名	高岡町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第7集
編集者名	島田正浩
発行機関	高岡町教育委員会
所在地	宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887番地
発行年月日	1995年3月31日

フリガナ 収蔵遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
橋上遺跡（ハシカミイセキ）	高岡町大字（タカオカチヨウ） 浦之名字橋上（ウラノミヨウ ハシカミ）	31° 73′	132° 65′	1994.1/5 ～1/26 1994.7/1 ～9/14	1,840㎡	農道整備

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	縄文早期	集石遺構	縄文土器 石器	

橋　上　遺　跡

高岡町埋蔵文化財調査報告書第７集

1995年３月 発行

発行　高岡町教育委員会
宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887番地
電話0985-82-1111

印刷　宮崎製版印刷株式会社